
ムーンナイトウルフ～月明かりのスポットライト～

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーンナイトウルフ〜月明かりのスポットライト〜

【Nコード】

N1311B

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

高校生活という新しい空間に一種の期待を持っていた主人公向井一樹。しかし、彼が所属する一年六組は揃いも揃って、根暗だらけで団結力のかからもないクラスだった。大きなショックを受けた彼は、そんなクラスと次第に距離を置き始めていた。そんなある日、学園祭を前に何をやるかも決まっていな一年六組に担任の教師が渴を入れるために生徒全員を体育館に呼び出すが……

Ready?

とある小さな町にある小さな高校。須磨ヶ岳高等学校は俺が今年から通うことになった緑豊かな高校だ。

緑豊かだ、という大抵は自然に溢れた素晴らしいところだと予想するかもしれないが、実際そんなことはない。なんたって、ただ山の上に建っているだけだからな。俺が思うに山の上に建っている高校っていうのはなんだかんだで緑豊かなとか、自然がいっぱいのかっていろいろ事実とは無関係なことを言われてかわいそうだと思うのだ。そして、俺は普通の公立中学校から受験を経てこの須磨ヶ岳高校、略して須磨校に受かって今年の春から気分新たに高校生活を楽しんでいるわけである。

いや、実際高校生活を楽しんでいる奴が自分の高校生活を振り返って楽しんでいるわけであるなんて書かないか。楽しんでいるならもっとあれは楽しいこれが楽しいとか言うべきだろう。

あほか、俺は。女じゃあるまいしそんなどうでもいい日常をぐだぐだと語れるかよ。まったく、今日の俺はどうかしている。モチベーションは低いくせにやたらとその場を盛り上げようとしている三流の司会みたいだ。しかし、そう思うのも無理はない。俺が所属することになったクラスはどうにもとっつきにくい奴らばかりなのだとっつきにくいというより、とっつかせてくれないといったほうが正確だといえる。まず、新クラスになったらするであろう自己紹介も担任のリードの下手さ加減も手伝って名前と通っていた中学を言うだけで終わっただし。こういう時はどのクラスにも必ずいるであろうクラスのムードメーカー的な存在の奴が場を持ち直すものだが、俺のクラスはなぜかそういうキャラが揃わなかった。

一人ひとりの自己紹介が終わるたびに訪れる気まずい間、それに充分に浸ってから次の生徒に自己紹介を促す担任。

もう最高だね。ここまで完璧だと笑えてくるよ。結局、始業式の日
は気まずい空気の中で担任が連絡事項を読み上げるだけで即解散と
なった。後で学年主任の先生から聞いた話だと、俺のクラスがホー
ムルームを終えた時間は本来予定していた時刻より三十分以上も早
かったらしい。

のっけからこんな調子だった俺のクラスはその後も特に誰かが誰
かと仲良くなるなんてことはなく、常に空虚な時間をかもし出して
きたため周囲のクラスからは根暗の空間とまで呼ばれる始末だった。
何とかしようとは思わなかった。もともと人同士の仲を取り持つ
なんて器用なことはできないし、これはこれでいつまでこういう状
況が続くのだろうかという賭けができたりもする。無論、俺は一年
間絶対無理だという側に賭けている。あいつらが自分から仲間に心
を開いていくことなんてまずありえない。

担任がそのことで他の教師や学年主任に絞られている様を何度も
見た。その後、屋上で頭を垂れている担任を暇つぶしとして見物さ
せてもらったこともある。

俺のクラスの担任は結構若い方だと思うけど、ここまで覇気のな
い教師というのは初めて見たね。ホームルーム終わるたびに一つ大
きなため息をつくあの癖も今では全員が日常茶飯事としてしか受け
取っていない。

ああ、慣れとは恐ろしい。

しかし、もう時期そうも言っていられなくなる時期がやってくる。
さあて、俺のクラスがこれからどのように動くか楽しみだね。

Summer midnight

ここまでおかしいとは思っていなかった。

何がおかしいか、て？

それは今の時刻だ。

午後十時。部活などで居残っている生徒だつて流石に強制下校を余儀なくされるはずのこの時間に、こともあるるか俺のクラスの担任はクラスのメンバー全員を呼び出した。

理由はだいたいわかつている。俺の高校、須磨ヶ岳高等学校は来週に学園祭を控えているわけだが——ちなみに俺のクラスがやる出し物は担任と委員長の半独断で演劇に決まった——おそらくそのことについてだろう。

やる出し物が決まるのはクラス中で一番だつただろうが、その準備をするのはおそらくクラス一、いや学年一遅かつただろう。何せ今に至るまで劇の題目を何にするかまったく決まっていなかったからだ。当然、題目が決まっていなかったことは演劇に必要な配役、小道具・大道具の設計、設置に至るまで全てが白紙の状態だった。そんな状態だというのにうちの担任は俺たちを呼び出してどうしようというのだろうか。教頭や校長のあおりを受けて強制手段に出るか？それもまたいいだろう。世間は教師が暴力を振るつただの教育のやり方がなっていないだのと批判するかもしれないが、俺にとつては好都合だ。ちょうど適度な刺激がほしかったところだしな。

須磨校は山の上にある学校だから当然行きは上り坂になるわけなのだが、この上り坂がまたしんどい。角度や距離もそうなのだが、夏が近いこともあってか相当蒸し暑いのだ。風も湿気を含んだものに変わっているため、あつてないようなものだ。俺はカッターシャツのボタンを既に上から二つ目まで外している。

それでも熱い。もう一個開けるか？いつそのことボタン外して楽な格好にしてやろうか？いやいや、この時間でも教師たちはまだ仕

事で残っている可能性がある。そこに出くわしたら説教を食らってしまう。俺は仕方なく学校前の自販機でジュースを買って飲みながら集合場所の体育館に向かった。

正直に言うと、学校に入ったときから嫌な予感はしていた。なぜなら、校内の電気が全て消灯されていたからだ。教師たちも学園祭前ということで早々と仕事を切り上げてしまったのだろうか。

当然体育館だけに明かりが灯っていることもなかった。

「チッ、なんなんだよ。少しは刺激を楽しめるかと思ったのに……」

誰もいない中で今更こんなことをぼやいてもしょうがないのだが、ぼやかずにはいられなかった。腕時計を見てみると時刻は十時十分、なかなかきりのいい時間だと思いつつ、もしかしたら体育館から皆移動している可能性を考えてみる。

「校内を探してみるか」

俺は明かりのない体育館に背中を向けて、一旦自分のクラスに行ってみることにした。思えば、夜の学校に入ったのは生まれて初めてだった。漫画なんかでは警備員に追われ

ながら柵を乗り越えて校外にでるシーンが印象的だが、こんなに静か過ぎては警備員も寝

ているか既に仕事を終えて帰っているかのどちらかである。結局のところ俺を楽しませる

刺激は何一つないただの肝試しのようだ。

俺は暗がりで見界の悪い校内を徘徊しながら自分の教室のある三階まで階段を登っていく。俺のクラスは六組だから廊下を半分と少し歩かなければならないのだが、これがまた面倒くさい。どうせなら一組とか十組にしてくれればよかったのに。

廊下を半分と少し行っただころの教室で俺は立ち止まった。ここが俺のクラスのはずだが、他の教室と同様明かりはすべて消灯されていた。悪い冗談だと思いつつ扉の取っ手に手をかけてスライドさせようとすると、ご丁寧に鍵がかかっているせいでいくら力を入れても扉はびくともしなかった。

何だこれは？

本当にそう思った。これほど悪質な悪戯は見たことがなかった。人が時間を割いてわざわざ来たくもない時間に学校まで来てやったというのにこの仕打ちは何なんだ？確かに十分ほど遅れては来たが、そのわずか十分の間に解散なんていうことはありえない。いくらなんでも、こんなクラスでも絶対にありえないことだ。それに仮に生徒が誰も来ていなくても担任は、あの担任なら絶対に俺たちのことを信じて待っているに違いない。このクラスの担任を受け持っている教師はそういう奴だ。なのに、そいつすら集合場所の体育館にも教室にもいない。念のため職員室も見てきたが、明かりは完全に消灯されていた。今夜は本当にどの教師ももう帰宅してしまっただけだ。

「くそ、何なんだよ！」

俺はやりきれない怒りを扉を思いきり蹴り飛ばすことで解放した。さらに数回蹴りを放つ。悪態をつけばつくほど自分がここにいることに、担任を信用してここまで来たことに腹が立った。

このまま帰っても別によかったのだが、それもそれで虚しいだけなので俺はもう一度だけ体育館に行ってみることにした。もはや結果は見えていたのだが……

Surprise

案の定、体育館は闇に閉ざされたまま、その周辺にも人の影一つ見つからなかった。

帰るか、俺がそう思っ てきびすを返そうとした時だった。俺の背後から地面の小石が何かを蹴るような音がした。ハッと後ろを振り返ってみると、柔らかな月明かりに照らされたこの生徒と思しき女の子が立っていた。

「あんた、もしかしくなくてもこの生徒だよな。こんな時間に何をやっているんだ？」

答えはわかりきっているが一応聞いてみる。月明かりと夜の闇がバックグラウンドだと俺みたいな奴でも少しはかつこよく決めた感じが出て満足感に浸れるな。

「担任の先生にここに集まるように言われて…」

この女の子は恐らく俺のことを守衛か何かと勘違いしているのだろう。やたらと怯えた声でそう言った。

「あんた、一年六組の人？」

俺の質問に女の子は「そうです」と今度ははつきり答えた。

「あんたもそうか。実は俺もそうなんだよ」

「え？」

「俺はあんたと同じクラスの向井だ。向井一樹」

「諏訪……実です」

女の子は俺が一年六組の生徒だとわかると、心底ホッとしたような表情を見せていた。

「誰もいなくて不安だったんです。遅れてきたから絶対に皆いるだろうと思っ ていたんだけど…」

「甘い甘い。おそらく俺とあんたを含めてみんなそういう面持ちでここにくるつもりだったんじゃないか？教室も見てきたけど誰もいなかった」

「先生は？」

「いなかった。一体どういいうつもりなんだ。俺たちを呼んだ張本人がいないんじゃないぜ」

「皆もないし、本当に学園祭に参加する気あるんでしょか？」

「さあね。そういうあんたはどうなんだ？」

「私は参加したいです！模擬店とかも出すし中学校のときとはまた違って夢があると思います」

「夢ねえ……」

「でも、このクラスの皆は先生も含めて皆真剣に考えようとしていません。クラスの出し物が演劇って決まってからも何も決めようともしないし……」

「あんたが進行役を買って出たらいいじゃないか」

「私が？無理ですよ。そういうのには向いてないから……」

俺は心の中で小さく頷いた。別にこの女の子が頼りなさそうだってわけじゃなくて、女っていうのは大抵大勢で集まって一つのことを言うときが多いから、彼女も例外ではないなと思ったただけ。しかしなんだ、少なくともこの女の子は少し、いやかなりやる気はあったらしい。

とにかくここで無駄話をしていてもしょうがない。俺は体育館の大きな引き戸を引っ張ってみた。

ゴゴゴゴ――

何と不思議なこともあるものだ。体育館の大きな扉が鈍い音を立てながらゆっくりと横にスライドしていったではないか。俺は思わず後ろを振り返って、女の子の表情を伺ってみると、彼女もまた信じられないと言わんばかりに目を大きく開いていた。

「こういうこともある……ものだな」

入ってみることを提案すると、彼女は案外すんなりついてきた。まあ、外で待つのも中に入るのも同じようなものだからな。だって、一人より二人のほうがいいだろう。

夜の体育館は先ほど俺が散策した校舎の中とはまた違った雰囲気

味わえる。俺たちは窓から差す月明かりを頼りに用具室がある一階から二階へと上がっていく。その間、俺たち二人の間に会話は無い。何せ入学してから約二ヶ月、ろくに話したことの無いクラスメート——しかも女子と——と何を話せというのだろう。それに、俺の後ろをついてくる連れにそんな余裕はないみたいだしな。これじゃまるで本当に肝試しみたいじゃないか。

俺たちは長い階段を上り終え、木の床でできた小さなグラウンドを一通り見回してみる。

しかし、目で見ててもわかるとおり一番奥のステージの上にも人は誰一人いなかった。まあ、いたら照明くらいつけるよな。俺たちを待ち伏せるためにこんな暗い中でいきをしめたりなんかしないだろう。

後ろの連れに気を遣いながら、ゆっくりと中央へと歩いていく。中央まで来たところで俺はふと足を止めた。そしてもう一度周囲を見回してみる。天井、ステージ、入り口、全てに神経を張り巡らせて人の気配を探る。夜の体育館は自分の息が大きく聞こえるほど静かな建物だった。

「どうやらサプライズなわけでもなさそうだな」

俺は深いため息をついた。まあ、学校の雰囲気を感じ取った時点でわかりきっていたことだが。高い確率で当たる予感的中しただけだ。

「さあて、どうしようかねえ……」

なんて言っただけいいものの特にどうしようとする気もなかった。このまま夜の体育館にいても不気味なだけだし、かといってクラスメイトでありながらほぼ初対面同然のこの女の子とどこか遊びにくく気にもなれない。

（遊びに行くってなんだよ！）

自分で自分に突っ込みを入れてみる。自慢じゃないがこの高校の周囲は山だけだから遊びに出るには街まで出ないといけない。いや、それ以前に今日が初対面同然の彼女を遊びになんて連れて行けばな

んだか自分が人さらいのように見えてしまっしょうがない。

結局俺の頭に最後に浮かんできたのはこのまま彼女を家の近くまで送って解散という消極的な作戦だった。

だって、他にどうしようもないではないか。他に打開策があるなら聞きたいものだ。

俺は女の子のほうを向いて消極的な作戦を実行しようと試みようとした。刹那、さっきまで全開だった体育館の扉が勝手に閉まりだしたではないか。

「くそ！」

俺は女の子を放って出入り口の扉に駆け寄った。閉められた扉を開けようとするがなぜか開かない。

「くそ、なんで開かねえんだよ！」

蹴ったり殴ったりしてみたが、扉は堅く閉ざされたまま動かない。次いで、中央に取り残してきた彼女の悲鳴。おれは再び体育館の中央に戻った。

「どうした！？」

「む、向井君。あ、あれ……」

初めて俺の名前を呼んだ彼女の指先は小刻みに震えていた。そしてその先には暗がりによく見えないが、人の姿のようなものが月光に当てられて映っていた。

「誰だ！？」

俺は女の子をかばうように背中後ろに隠した。

「ウ、ウウ……」

「グふグふ……」

不気味な声を発するこいつらの正体は声の低さから男と推測できた。だんだんと月明かりに照らされて姿がはっきりとしてくる。

「あ、あれ？」

俺は張り巡らせていた緊張を解いた。よくみればこの二人は俺と同じクラスの男子生徒だ。名前は当然知らないけど、顔はなんとなく覚えていた。

「お前ら、一年六組の奴だよな？」

返答はないが、俺はかまわずに続ける。

「まったく、脅かすんじゃないよ。お前らがいるってことは他の奴らも来ているのか？」

しばらく返答を待ってみたがやはりこいつらは左右に体を揺らしながらこちらの動きを観察している。

「…あのさ、クラスに馴染めてないのはわかるけど聞かれたことくらい答えろよ。それくらいいしないと本当に根暗の集団になっちゃうぜ？」

「……………」

あゝあ、駄目だこりゃ。何を言っても暖簾に腕押しって感じだな。それにしてもこいつら、なんていうか生氣つてもものが感じられないような気がするんだが……

「向井君、この人たちの知り合いですか？」

やはり彼女にはこいつらが同じクラスの奴だという面識はないようだ。たいがい同姓のクラスメイトの顔をすぐに覚えるものだな。

「ああ、こいつらは俺らと同じクラス……の？」

俺が話をしている途中に割って入ってきた一本の腕。俺は右頬の辺りを強く引つかかれた。触ってみると少し血も出ている。

「お前、やっていいことと悪いことってのがあるだろ……？」

流石に今の一撃は俺の堪忍袋を刺激したね。まだ切れてはいないが、こいつらの今後の行動によっては数秒後にでも切れそうだ。

「フ、フウー」

「シャハウアー！」

俺が最大のメンチをきかせていると言うのに、こいつらはそれがまったくわかっていないのか奇声を上げて何やら構えを取っている。

「む、向井君！顔から血！」

彼女もようやく事の重大さに気づいたようだが、その頃には俺の堪忍袋の緒は甲高い音と共に真つ二つに切れていた。

「諏訪さん、だっけか？少し離れていてくれないかな」

「え？」

「人の話を聞かない悪い子にはお仕置きしなきゃな」

Battle 1

指の骨を鳴らしながらゆっくりと目の前にいる男子生徒たちとの間合いを詰める。

状況は二対一で圧倒的に俺が不利だ。なおかつ俺は喧嘩に強いわけではないのだが、この二人はどこか逝ってしまっているような感じがする。俺と対峙しているのにも関わらず奴らの目の焦点が俺の顔に合っていない。これなら隙を突くことは十分に可能だ。

何があつたか知らないし、何のつもりなのかも知らないけれど……
「そういう態度はいただけないぜ！」

俺は大きく一步を踏み出し、奴らの間を縫うようにして中央を駆け抜けた。このまま後ろから一人の急所に手刀を当てる……つもりだったが、流石に虚ろな目をしていても反応だけはきっちりとしてくるようだ。すぐに後ろを振り向き、俺の放った手刀を軽く払う。
「ウー！」

まずい！一人はナイフを持っている。高校生のくせしてなんでそんなもの持っているんだよ。最近物騒だからか？しかし、こいつらは知らないね。ナイフを持った奴がナイフを持った奴に切りかかるうとすると逆上された勢いで逆に自分が切られることを……いや、俺はナイフ持っていないけど。（健全な高校生ですから）

とにかくナイフは危ない。俺はいったんナイフを持った奴だけの攻撃に集中する。ナイフの動きを見切り、奴の手からナイフを払い落とし、そのまま拾ったナイフを振り回しながら急所を手刀で叩く。後は一対一の勝負だ。奴の急所を狙いつつこちらの急所を狙われないうようになるべく隙のない動きを心がけて……今だ！

俺の膝蹴りを見事にみぞおちに受けた二人目があっさり木の床の上に撃沈する。

「なあんだ、意外と弱いな」

パーフェクトとはいえないものの、鬨いに勝利した俺は勝者の威

敵を既に気絶している野郎どもに見せつけた。

「向井君、大丈夫!？」

戦い終わった俺の元に彼女が駆けつけてくる。俺は大丈夫だということをガッツポーズを見せることで示すと、今度は彼女の視線が伸びている男二人に降りた。

「この人たち、同じクラスの人なんですよね？」

「顔からしてそうなんだけど…」

「何で急に襲ってきたの？」

「知るかよ。俺が聞きたい」

『その問いに、答えてあげるが世の情け』

突然大音量で体育館内に響くスピーカー。なんだなんだ、やっぱりこれはサプライズなのか？

『君たちは我が悪魔軍の幹部候補として選ばれた。さあ、この地図を持っていきます。幹部候補の茨道を歩いてくるのだ』

その放送が途絶えると、天井からふわふわと一枚の紙切れがゆっくりと落ちてきた。

「これは…」

「学校の見取り図じゃないか。なんだ、やっぱりサプライズじゃないかよ。それに、あの声は明らかに俺たちのクラス担任の声だよな」

俺はスピーカーを睨みつけた。

「おい先生、その年になって魔王気取りか？生徒を二人も使ってくだらない芝居をして恥ずかしくないのかい？」

『向井君、これは芝居などではない。君たちは既に我が策に陥った。君たちの命はもはや私が握っているのだ』

どうやらスピーカーの向こうにいる担任は完全に頭が逝っちゃまっているようだ。セオリー通りならここであの先公の脳天に一発かましてやる所だが、あいにくと俺はもう高校生だ。そんなくたらないことには最初から首を突っ込まない。

「行こうぜ。こんな悪ふざけに付き合っていられるかよ」

俺はどうしようか戸惑っている連れにかまわずそう言つと、体育

館の扉に手をかけた。

「ぐあ!？」

何だ、今のは。静電気でも走ったのか? いや、それにしちゃ痛みがかなり激しいぞ。

俺は手を軽く振って麻痺を解いた後、もう一度扉の取っ手を掴む。

「おああ!？」

やはりおかしい。セーターとか静電気が起こりやすい服装なんてしていないし、さっきの静電気もちゃんと振り払って解いたはずなのに。俺が忌々しげに扉を睨んでいると、三度スピーカーからやかましい笑い声が聞こえた。

『無駄だよ向井君。君と諏訪さんは既に私の手の中だと言っただろう。私が冗談を言うような性格ではないことは承知してくれていると思っただがね』

くそ、得意気に大笑いをしやがって何様のつもりだあの教師! 第一こんなの校長にばれたら定職どころか一氣に辞職ものだぞ。

『君たちにはこれからその地図を片手に我が下僕たちと戦ってもらう。そして見事私を見つけ出したら君たちの勝ちだ』

「先生、馬鹿なことをしないでください! 演劇のことを決めるために今日は集まったんじゃないんですか!？」

『……今夜は月がきれいだ』

彼女の問いとはまったく関係ない答えだった。スピーカーから流れる担任の声はさらに続けた。

『劇の上演にふさわしいではないか! さあ、私の作ったシナリオを完成させてここまで来るのだ!』

「先生!」

なおも食い下がろうとする彼女の肩を俺はそっと掴んだ。

「やめておけ。何があつたのかは知らないけど今の先生は完全に狂っている。あんまり気乗りはしないけど今は奴のシナリオとやらに付き合うしかなさそうだぜ」

「何言ってるの! 戦いなんて馬鹿みたいじゃない!」

「俺もそう思う。けど、現にあいつは俺たちがこれに乗らないと帰す気はないみたいだ。扉に変な仕掛けが仕掛けられている」

「そんなあ……」

女の子はへなへなとその場に座り込んでしまう。シヨックなのはわかるが、それは俺だって同じだ。いきなり襲ってきたクラスメイトに狂った担任、訳のわからないゲームに付き合わされて俺だって帰れるものなら帰りたい。しかし――

「今、俺たちをじりじりと追い詰めようとしている奴ら同様、先公は俺たちを帰す気なんてまったくないようだぜ」

俺の言葉にようやく彼女も気づいたのかハッと周囲を見回した。

Battle 2

人数は先ほどと同じ二人。どうやらまたうちのクラスメイトの男子らしいな。でも、今度はこっちには武器があるんだ。そうそう簡単には――

「やられない！」

俺は囲みを破るようにまずは一人にナイフを構えて飛び掛った。自分では見事な体当たりのつもりだったが、バックステップで軽く回避される。何とかバランスを保った俺はそのまま相手に攻撃の隙を与えないようにステージ側へと追い込む。ステージと床とはかなりの高さがあり、よほど跳躍力がないと正面からでも飛び移ることは難しい。まして、こいつは後ろを向いたまま俺の攻撃を裁いている。この状態で飛び移ることなどまず不可能だ。

俺は作戦通り相手をステージに追い詰め、軽くダウンを奪った。

「さて、あと一人……!？」

しまった、しかしその言葉が口から出なかった。一人を相手にしているその隙にもう一人の男が連れの首を締め上げていた。小柄で腕も細いくせにあの怪力はどこから出てくるんだ？とにかくこのまま殺させるか。俺は首を締めている手を引き剥がそうとするが、まるで通用しない。くそ、何なんだこいつ。隠れ怪力なのか？いや、でもこいつはいつも一人教室で本を読んでいた奴だったよな。そんな奴にどうして？

俺はふと奴の目を見た。最初の二人同様やはりこいつも焦点が今、首を締めている相手にあっていない。ただ不気味な笑みを浮かべて殺人を楽しんでいるように見える。

（早くしないと）

俺は最終手段で奴の右手をナイフで刺した。そして、そのまま中で数回肉をえぐる。

「ギャハあ!!」

よし、手が外れた。締上げられていた彼女は地面に落とされ激しく咳き込んでいる。

このまま決める！

俺は渾身の右ストレートを敵の顔面に見事に決めた。敵は鼻血を吹き出しながら数メートルほど吹き飛び、そのまま起き上がることはなかった。

「ハアハア……」

な、何とか勝てた。俺の体から力が抜けて、思わず膝をついてしまっ。

「あんたも、大丈夫だったか？」

俺は横で座り込んでいる連れに荒い息を吐きながらつぶやいた。

「死ぬかと思いました……」

確かに、あれは危なかった。気づくのが遅れていたら今頃彼女は

……

「情けないな、女の子一人守れないなんて……」

俺は静かに木の床を殴りつけた。認めたくないが、今の俺は自分の身を守るので精一杯だ。

「でも、前に進まなきゃな」

俺はよろよろと立ち上がりながらつぶやいた。

「あのトチ狂った先公にはどうやら鉄槌を下してやらないといけな
いみたいだからな」

俺たちが戦いに勝利したことで体育館の扉がゆっくりと開放されたようだ。

「見てろよ先公！人を殺そうとした罪をその体に刻んでやるからな
！」

Exploration

体育館を出た俺たちは一度作戦を練るために学食のテラス——中よりかは当然外のほうがいいだろう——で作戦を練っていた。どうやらこの学校の門は全て閉ざされたものと考えてよいようだ。ここに来る途中に正門を抜けようと試みたのだが、閉ざされている上に俺が体育館で食らった電撃の罠が張り巡らされているため門を乗り越えることも不可能だ。まだ正門しか確かめていないが、恐らくどの門からも脱出は不可能だろう。

「学校の見取り図をもらった方がいいが、次にどこに行けばいいんだ？」

俺は地図を見ながら唸って考える。その横で俺の連れは黙ったまま買ったジュースを飲んでいる。さつきからずっとこの調子なのだ。どうにも話しぶらい。

「あんたはどう思う？」

俺の質問にも応答なし。

まいったねこれは。

「あの……」

ようやく口を開いたか。俺は一度見取り図から目を離して彼女と目を合わせた。

「私には諏訪実って名前があるんです。あんたなんて呼ばないで」

彼女の……じゃなかった諏訪実の目は明らかに怒気を含んでいた。その瞳の中には若干今の状況に対する悲観もあるようだ。

「悪かった。じゃあ、諏訪さん？改めて聞くけどこの先どうしたらいいと思う？」

「……わからないです」

「そう、だよな……」

俺はあっさりと引き下がった。機嫌の悪さから大体こういう答えが返ってくるであろうことはわかっていた。空気を読むのが苦手な

俺でも流石にここまで表情に出されると相手が何を考えているのか読めてしまう。

「向井君は本気で先生たちと対決する気なんですか？」

押し殺した低い声で諏訪が問う。

「そのつもりだよ。俺だって本当は帰って寝たい気分だけど仕方ない」

「…私はまだ何が起こったのかわからない。ううん、わかりたくない」

「それは俺だって同じだよ。だけど、諏訪さんも見ただろ。正門に変な罫が仕掛けられているのを。おそらく全ての門にあれを仕掛けられていると思っぜ」

「……………」

それ以降、俺たち二人の間に会話はなかった。諏訪はまだ納得のいかない顔をしているが、それをいつまでもなだめている場合でもないんだ。さくさく終わらせて早く寝たい。

俺が立ち上がったのを合図に諏訪ものろろと立ち上がり、俺の後ろをついて歩く。

さて、まずはどこに行くかな。俺は学校の見取り図を覗き込んだ。しかし、よく考えてみれば担任が放ったという下僕とやらがどこにいるのかを聞いていない。あいつはこの地図を見て進めといっただけだった。

まったく、何で夜中の高校でかくれんぼなんかしなくちゃならないんだよ。

ああ、諏訪の気持ちがひしひしと伝わってきてしょうがない。が、ここで挫折するわけには行かないんだ。とつとつ、下僕を探し出していかないと。

俺たちはほぼ無目的に近い状態で学校の敷地を歩き回った。まずは食堂から最も近い芸術棟だ。この棟は三階まであって、一階は音楽関係、二階は美術関係、三階は家庭科関係となっていたはずだ。

俺たちは月明かりを頼りに芸術棟を攻略していく。一階の音楽関

係の部屋は主に選択科目で音楽をとっているか、吹奏楽部が使用している。楽器倉庫を兼ねた部室なためそれなりに広い部屋が多いが、ここはシロだった。続いて二階の美術関係もシロ。最後は家庭科関係の物品が揃っている三階だ。

調理室と書かれた扉を大きく開け放つ。

月明かりを頼りにするだけじゃ誰かいるかはよくわからないな。

やはり、中に入ってみるしかないか。俺たちは今までと同様に慎重に教室の中に入っていく。

ガラガラ――

それは俺たちが教室に入って数秒後のことだった。最初は後ろの諏訪が扉を閉めたのかと思ったが、彼女も仰天して後ろを振り返ったところを見るとどうやら当たりくじを引いたようだ。

「向井君……！」

「ああ、次はどいつだ？ どうせ俺たちのクラスメイトを使ってくるんだろうが」

俺は静かにナイフを構えた。しかし、一向に敵が出てくる気配がない。

ハツタリか、一瞬そう思ったがその考えはすぐに抹消される。俺は背後から感じた気配に合わせるようにナイフを振り下ろした。

甲高い音と共にナイフを持った俺の右手に強烈な電撃が流れた。

相手が放ったのではない。相手が防御したことによって俺の腕にダメージが襲ったのだ。

（一体なにで防御したんだ？）

夜の闇と同じ色でよく見えないが、加えて硬い性質を持った調理室によくあるものといえば――

「ちゅ、中華鍋……！」

この叫びは俺ではなく諏訪である。彼女も流石にこういった戦いに中華鍋を使用してくるとは思っていなかったのだらう。そこら辺は何でもありのとんでもバトルだな。まあ、殴り合いだけの二流格闘ゲームよりかは楽しめそうだな。しかし、ここでとんでもない誤

算が訪れた。

てつきり中華鍋みたいな重い物を武器に使ってくるくらいだから相手は男だと思ったのだが、これを持っているのはどう見ても女の子だ。髪の長さからして男ではないことは明白。うちのクラスに家庭科部の女の子なんていたんだねえ。

ヒュウ！

「げえ！」

俺はすかさず後ろに飛び退いた。中華鍋の娘とは別の子が包丁で俺に斬りつけてきたのだ。

「おいおい容赦なしかよ……」

普通の女子高生が包丁を持って夜を徘徊するなよ、と突っ込みたかったがおそらくこの娘たちも体育館の男四人と同様に担任に操られているのだろう。だとしたらこちらの静止なんて聞くはずはないよな。やっぱり約束に従って倒すしかないのか！？しかし――
(操られているとはいえ女の子をナイフで斬りつけたり素手で殴ったりできるわけがねえ)

ここでの相手は三人。しかも、あろうことが全員女である。

「諏訪、今回は頼む……」

俺は後ろに立っている諏訪に聞こえるようにささやいた。

「女の子を殴る趣味はないんだ。今回はあんたが戦ってくれ」

「へ？ど、どうして！？」

まさか自分に振られるとは思っていなかったらしく諏訪が悲鳴に近い叫び声をあげる。

「私にできるわけないじゃないですか！さっきの男の子たちにもまるでかなわなかったんだから！」

「あれは相手が悪かったただけだ。あんたならやれるぜ、真の勇者に目覚めるみのりん！」

「できないと思ったらできない！だいたい真の勇者って何！？みのりんなんて呼ばないでよ……！」

「ああ、もう。少し落ち着いて喋れ！」

「落ち着けるわけじゃない！」

「落ち着け！」

「嫌！」

「わがままいう……」

俺の言葉を最後まで言わずに三人目の女の子がボウルをブーメランのように飛ばしてきた。すかさず右腕で防御するもののやはりそれなりに痛い。しかも回転が掛かっているため痛み倍増というおまけもついている。俺は思わずその場にうずくまった。

「向井君……！」

「いててて、ほら見たことか。あんたがわがまま言うから……」

どうやら俺の腕のダメージは予想以上にでかい。ガードした左腕が上げられない。

「向井君、どうしたの！？」

「左腕があがらねえ。右じゃないだけマシだが、これでは……」

俺は戸惑った表情をしている諏訪にかすれた声で「頼む」とだけ告げた。ここで彼女が引き受けてくれないと本当にまずいことになる。

「頼む。あいつらを気絶させるだけでいいから」

俺はもう一度はつきりとした声で、諏訪の目をしっかりと見て言った。彼女は動揺と戸惑いが重なったせいか、目が泳いでいて俺の視線と合わせようとしないう。彼女と俺の間には俺が初戦の相手から奪ったナイフが落ちている。

彼女がもたもたしている間にも三人の女の子の影は順調に俺たちとの間合いを縮めている。

くそ、これ以上は限界だ。俺は右手を伸ばして落ちたナイフを拾おうとした。

「向井君は休んでください」

ナイフを拾おうとした俺の手を押さえながら諏訪が緊迫した声で、しかしはつきりとつぶやいた。

Battle 3

諏訪は堅い表情で落ちているナイフを拾い、自分の正面にかざした。そして、闇雲に走っていく。諏訪の攻撃は難なく中華鍋によって阻止され、背後から残り二人のパンチやキックを受ける。それでも懸命にナイフを振り回すが、彼女たちに致命傷を与えるにはいたっていない。このままじゃ先に諏訪の体力が尽きてしまうだろう。やはり俺が叩かないと駄目か。俺は右手で、調理台を支えにしながら立ち上がる。

（何かないものか、彼女を助けられるようなものは……）

俺は必死に調理台の周囲を見回すが、普段こういう教室に出入りしたことがないので何がどこにあるのかまったくわからなかった。しかし、そうこうしている間に戦局のほうはだいぶ変わっていた。中華鍋の娘の隙を突いたのか、彼女の最大の武器である中華鍋が諏訪実の両手に渡っていた。彼女はそれで三人の攻撃を何とか防衛しているが、このままでは攻撃に転じることができない。やはり俺が何とかしなくては。

俺は調理台下の収納子を開け、適当な器材を三人の少女たちに向けて投げた。少女たちは突然の出来事に全員が一斉に俺を見る。

「今だ！力いっぱい中華鍋で叩け！」

俺の声に答えるように諏訪は大きく中華鍋を振り上げた。

お、おい待て。いくらなんでも脳天直撃はよしたほうが――

ゴワァァン。

思わず耳を塞ぎたくなるような鈍い音が辺りに反響してしばらく俺の耳に残り続けた。諏訪は予想に反して振り上げた中華鍋を固まっている女の子たちの一人の背中を強烈に殴りつけた。勢いのあるその一撃はそのまま他の二人の女の子も一緒に窓側へと吹き飛ばしてしまうほどである。

恐るべし、火事場の馬鹿力。

俺は心の中で三人の少女たちに向かって合掌した。いくらなんでもあんな一撃をもらってしまったら合掌したくなる。しかし、当初の目的通り彼女たちを気絶させることはできた。死んではいないだろう、多分。きつと、おそらく、絶対に死んでいないと思いたい。

「む、向井君…」

うゝむ、中華鍋を持ちながら弱々しく微笑む諏訪にどこか恐怖を感じるのは気のせいだろうか。

「や、やりましたよ…」

弱々しく微笑む諏訪の足が大きくふらついた

「おっとつと…」

俺は倒れこんでくる諏訪の体を両手で支えた。外傷はそんなに目立たないものの受けたパンチやキックで所々あざができていた。割と痛そうだし、女の子がこんな傷を残したまま明日を生きられるわけがない。治療はしてやりたいが、しかしここは調理室。救急用具など置いているはずもない。となれば行き着く先は保健室ということになるのだが、二つほど問題点がある。一点目は保健室が開いているかどうかだが、体育館やここがごく自然に開いていたのだ。おそらく保健室も例外ではないだろう。問題は――

俺は自分の体にもたれて眠っている女の子を見下ろした。

Short Heaven

今夜はいろいろあった。

戦いもしなければいけなくなつたし、その疲れが出たのだろう。諏訪は当分起きる気配がない。とても自分の足で保健室に入つてくれそうにない。

唾を飲む音がはっきりと聞こえた。まさか、俺がそんなことを？

これはもしや闘いを頑張つた彼女を褒めろという意味の神のお告げなのか！？

——って何を考えているんだ俺は。ただ、この娘を運ぶだけだろ。簡単なことじゃないか。簡単な……

俺はハツと我に返ると急いで手を引つ込めた。俺の右手に彼女の髪が当たつていたのだ。

まずいな、心臓の鼓動が止まらない。というか、女の子の髪つてこんなにさらさらしているんだなあ。

「……違うだろー！！」

俺は思わず叫んでしまった。諏訪を起こしてしまつたかと思いきや彼女は俺の体の中で寝返りを軽くうつただけだった。

ふう、起こすことにならなくてよかった……。あまりよくないか。結局俺は三十分近く悶え苦しんだ後、諏訪を背負つて保健室に行くことにした。ついでに彼女用の武器としてこの中華鍋もいただいでいくことにしよう。

何だか保健室までの道のりがとつとなく長く感じた。俺はそれほど背が高いわけじゃないから彼女をおぶって支えるには少々力が心もとなく、さらに中華鍋も一緒に背負っていることもあって何度か休憩を挟みながらの道のりとなつたのだが、それを含めても相当長い旅だったと思う。

保健室の扉はやはり簡単に開き、そのまま彼女を医療用のベッドに寝かせる。そして、不器用ながらも簡単な手当てをしてやった。

俺の怪我も治療するついでに。

べ、別にやましいことは何もしていない。してないからな！

俺は諏訪の隣のベッドに座った。窓を見上げると月がだいぶ高い位置にあるのがわかる。保健室の時計は十二時前を指していた。

月明かりに照らされた諏訪はまた一層色っぽく見えた。元が中の上くらいということもあるかもしれないが、月明かりに照らされたことで俺の中では上の中くらいにまでメーターが上がっていった。女つてのは月明かりを浴びても綺麗になれるものなのだと実感させられた。はあ、俺にもっと勇気があればもしくは……いやいや何を不謹慎なことを考えている俺！

気を正気に保て！

精神を集中しろ！早まってはいけない。いけないんだ！

俺は秒刻みで襲ってくる衝動を必死に抑えた。願わくは諏訪さん、早く目覚めてください。

「うーん……」

俺の願いがかなったのか、諏訪は意外と早くに目を覚ました。

「あ、向井君……」

「よう、目が覚めたか？」

「私、どうして寝ているの？」

「あんたはよく戦った。覚えているか、この中華鍋で勝ち取った勝利を」

俺は床に置いてある中華鍋を拾い上げて、彼女に見せた。すぐに思い出したのか諏訪は小さく頷いた。そして、しきりに傷を受けたあたりを手で触っている。

「向井君が手当てをしてくれたの？」

「あ、まあ、その……女の子を傷を負わせたままにできないし……」
しどろもどろになりながら俺は言った。そんな俺に諏訪は嬉しそうに笑って「ありがとね」と言ってくれた。ああ、また心臓の鼓動が高くなってきた。それに顔も何だか熱い。俺は顔のほてりを隠すために学校の見取り図を見下ろした。

「さっきの女の子たち、大丈夫かな…」

予想通り諏訪はさっきの相手のことを心配しているようだった。

まあ、中華鍋で叩いて窓際の壁に叩きつけたんだから無理もないか。

「大丈夫だろ。それに諏訪は自分を守るために戦った。言わば正当防衛って奴だからいいんだよ」

「そうじゃなくて、死んでないよね？」

「あゝ、結構派手にぶつかっていただけ多分大丈夫だろう」

根拠はないけど……。

「とにかく俺たちには後ろを振り返っている余裕はないんだ。さくさくつと事を終わらせてさっさと帰って寝るのだ」

「アハハ、そうだね」

諏訪はおかしそうに笑った。どうやら少し緊張がほぐれてきているようだ。しかし、クラス内では気づかなかったけど彼女ってこんなに明るい娘だったんだ。俺がたまに見る感じではものすごく真面目そうで融通利かずに見えたんだがな。やっぱり話してみないとわからないってことか。

体力の回復も含めて十分に休息をとった俺たちは再び担任の仕組んだシナリオとやらを打破するために夜の学校探検を再開した。

今、俺たちがいるのは職員室やクラスの教室がある本校舎。部屋の数が多い分大変だが一番バトルを仕組むには狭い場所が多いところだ。案の定、二階から四階にある各学年の教室、一階の職員室や校長室——校長室でバトルをして大事な旗やら記念品やらを壊したら大変だからな——にも刺客はいなかった。廊下ではちあわせるかとも思ったが、奴らはどうやら道端でのバトルはお気に召さないらしい。俺たちは本校舎をあつという間に攻略して、次の場所に向かおうとしたのだが——

「待つて、向井君」

四階を探索し終えたところで諏訪が俺を呼び止めた。

「屋上をまだ調べていないんじゃないかな」

意外な落とし穴だった。本校舎には屋上へ通じる階段があるのだ

がいつも壊れたハードルに『立ち入り禁止』の札が張ってあるのだ。そして、それは今夜も例外ではなかった。

どうして屋上が立ち入り禁止なのかはわからない。この学校で屋上から飛び降り自殺でもした生徒がいるのならまだしも、そういう事例は今のところ俺が知る限りではない。

「行ってみるか」

「うん」

俺たちはハードルをまたいで屋上へと続く階段を上っていった。立ち入り禁止と書かれていても所詮は入り口をハードルでバリケードのつもりになっている程度。生徒が万が一入ってもすぐに引き返すように踊り場を過ぎた辺りからやたらと清掃用具や各部活の備品などが階段に散乱していた。俺たちは何とかそれを避けながら、屋上への扉を開く。普通ならここも鍵はかかっているのだろうが、今夜はあつさりと開いてしまう。防犯対策なんてあったものじゃない。

屋上の扉を開けると夏の湿った風が俺と諏訪の体にまとわり着くように吹きつけた。そして、もはやお約束といえるように屋上と校舎を繋ぐ扉が大きな音を立てて閉じられた。

さあ、今度は誰が出てくるんだ。

「向井君、左腕は大丈夫ですか？」

諏訪が声を潜めて聞いてくる。

「もう平気だよ。ちゃんと冷やしておいたからな」

俺は左腕を大きく回してみせる。氷嚢で冷やしてすっかり痛みも取れていた。ついでに冷蔵庫のジュースも飲めたことだし。

コツコツ。

乾いた足音と共に月夜に姿を現したのは俺のクラスの男子生徒四名。そのうち二人はわかる。一人は俺の前の席の奴で確か本田とか言ったな。背が高くがっちりしたむさい奴だが、このクラスの中では結構話しやすいタイプだと思う。もう一人はその本田の友達で安島とか言う名前だったな。出席番号順である行の安島とは行の本田がどうやって知り合ったのかは知らない。気がついたらそれなりに話

す仲になつていたらしい。まあ、同じクラスだしそれくらい普通か。

「ヨウ、ムカイジャネエカ」

「オッス」

少し違和感を覚えたものの俺はいつものように片手を上げて挨拶をする。

「お前、こんなところで何をしているんだ？先生に呼ばれた場所は体育館だろ？」

「……………」

俺の問いに対して本田は何も答えない。代わりに安島が口を開いた。

「ムカイクン、キョウハエンゲキレンシュウのショニチダヨ。コレカラオレタチはガクエンサイニムケテケイコラスルンダ。オクレテキタキミタチハ、バツトシテオレタチノレンシュウノセイカヲミナイトイケナイ」

ソノトオリダ、と本田たちの後ろにいる二人の男も合唱する。

「ソウイウコトダ。スワサンニモカクゴヲシテモラウゼ」

本田は不気味な笑みを浮かべると、親指をパチンと鳴らした。刹那、後ろに控えていた男たちが一斉に飛び出す。

「くそ、本田も操られていたのか」

俺は舌打ちをしながらナイフを構える。

「諏訪、来るぞ！」

諏訪は堅い表情で調理室から拝借してきた中華鍋を構えた。

Battle 4

最初に飛び出してきたこいつらの武器は…… 錐と金槌かよ！しかも錐はナイフのように斬りつけてくるのではなく、飛び道具として使うのか。こいつはやっかいだな。

「錐は私に任せてください！中華鍋の底力を見せてやるんだから！」その台詞ははっきり言うてどうかと思うが、確かに中華鍋なら錐くらい簡単に防げる。よし、俺はもう一人の金槌野郎を集中的に叩くとするか。俺は錐を投げてる奴から距離をとりつつ、もう一人の金槌野郎と対峙する。ナイフと金槌じゃ明らかに攻撃力が違うが、その分あいつは動きが鈍くなるはずだ。両手に金槌なんか持っていたら重くてしょうがないはず。

「ムーン！」

「！？」

嘘だろ。さっきまで打撃で攻めていたくせに金槌野郎は球に俺から距離をとったと思うと、腕を振り回しながら金槌を投げてきたではないか。金槌は回転しながら揺るかに弧を描いて俺の頭のとっぺんに向かって飛んでくる。

あ、危ない。俺は姿勢を低くして弧を描いて飛んでくる金槌の下を潜り抜けた。

「こおの……」

ついでに金槌野郎の懐に入り込んだ俺はそのままがら空きになった奴の腹に二発のパンチを叩き込み、よろめいて倒れこもつとする奴に改心のアップパーをかます。

よし、倒した。

俺はすぐにもう一方で戦っている諏訪のほうを振り返る。諏訪もさっきの一件で闘いのコツを掴んでしまったのか錐を中華鍋で防ぎながら、確実に錐野郎に接近している。そして――

（でた。超必殺　みのりんスイング）

彼女が持っている中華鍋を自身の背中後ろに振りかぶるようなポーズを取ったら要注意だ。その後にはほぼ百パーセント回避不能で、攻撃範囲の広い中華鍋アタックがくるからである。そして、あの技を受けた当人はもちろんだが、周囲にいる仲間及びギャラリにも注意が必要である。なぜなら中華鍋の直撃を受けた対象者は、そのままランダムに吹き飛ばされてしまったためだ。吹き飛ばされる位置が予測不可能なため上手くすれば巻き添えを食わずにすむこともあるが、大抵の場合においてそれはないだろう。今までのどのバトルフィールドよりも広いここ屋上だが、みのりんスイングにおいてはその法則は通用しない。フィールドが広ければ投げ飛ばす範囲の広さを利用し、フィールドが狭ければ周囲の壁や柱、天井を利用して相手をバウンドさせることを利用する、まさに完全無欠の投げ技だ。

「ごめんなさいー！！」

ドゴォーン！

これは決して俺が誇張しているわけではない。実際、そういう音がしたのだ。まるで爆発でもしたかのようなそんな音が。ごめんなさいという台詞という申し訳なさそうな表情とは裏腹なとんでもなく豪快な技である。

そのまま錐野郎は横腹を強打し、やや斜め後ろ気味に吹き飛んでいく。そして、その斜め後ろにやってくださいと言わんばかりに運悪く立っていた本田と安島。

「エッ？」「」

一瞬だが、二人の間抜けな声が聞こえた。しかし次の瞬間には「アッレ〜」といった時代の悲鳴だと思えるような悲鳴をあげながら夜空の星となった。いや、実際は落ちる寸前で倒れたただけだけど。というかあいつらは一体何をしに来たんだろう。俺たちに敵をけしかけに来ただけか？

何はともあれ闘いに勝った俺たちは屋上を後にした。（もちろん投げ飛ばされた奴らに合掌をしてから）

ところで俺には気になっていることが合った。

「あんた、肩は大丈夫なのか？」

あれだけ豪快な投げ技をしているにもかかわらず、諏訪は肩がはずれたとか痛いとかまったく言っていない。普通、中華鍋であんなことをしたら肩くらい壊しそうなものだが。

「全然平気ですよ。それにしても、中華鍋って丈夫なんですね。あれだけ人を叩いても曲がったりしないし」

諏訪はそう言って中華鍋をいい子いい子と言わんばかりに撫でている。

この娘、本当にさっきまでは闘いが嫌だと言っていた女の子か？保健室でのあの大人っぽい色気はどこへいったんだあ！

「向井君、大丈夫？どこか痛むんですか？」

諏訪はわなわなと肩を震わせている俺の肩にそつと手を置いて心配そうなまなざしを向けてくる。

まずい、何だか今にでも俺の頭が破裂しそうだ。こんな調子でいつまでも迫ってこられたらとてもじゃないが俺は、俺はあ——

「死ぬうー！！」

「ま、待ってよ向井君！やっぱりどこか痛いんですか！なら早く手当てをしないと……。向井くん、待ってー！保健室はそっちじゃないってばー！」

月が南から西に傾きかけようとしている初夏の夜長。須磨ヶ岳高校から奇妙な叫び声が聞こえたと後日付近の住民の方から通報があったことはいうまでもない。

Let's dancing

諏訪と追いかけてくことをしているうちにやってきたのは学校のメイ
ンストリートとも言える生徒のふれあい道路。なぜ生徒のふれあい
道路などと呼ばれるのかというと、これまた単純な理由で、学
校に通う生徒が朝、正門を通るときに友人やクラスメイトと出会う
からふれあいらしい。この道路に名前をつけた先生には申し訳ない
が、うちの高校はどちらかというと、正門よりも西門を使用する生
徒が圧倒的に多い。さらに追い討ちをかけるなら大抵の生徒は電車
やバスの駅から既に一緒なため、学校に来てから出会うなんてこと
はない。教室でクラスメイトと挨拶を交わすことはあってもこのス
トリートで挨拶を交わしている生徒は極々稀だ。

気分を壊したと思われるかもしれないが事実なのだからしょうが
ない。若いうちというのは事実上事実としてはつきりさせておかな
ければ気がすまない性分なのだ。（かなり偏りのある意見です。中
にはふれあいを大事に思う人だっているはずです！）

とにかく俺を保健室に連れて行くこうとする諏訪の魔の手から逃れ
るべく、俺はいつの間にか正門のほうへと走っていたらしい。

話を元に戻そう。このふれあい道路の横にはおそらく一番学校が
ここに金をかけているであろう噴水広場がある。珍しい草木も多く、
この学校の中では一番癒される場所だと俺は思う。特に女子なんか
はここで弁当を食べる生徒が多い。

「ふれあい広場ですね、ここ」

後ろから俺を追って走ってきた諏訪が息を整えながら言う。頼む
から中華鍋を背負ったまま走ってこないでほしい。怖いなんてもの
じゃないから。

走ってきた疲れもあったし、俺は広場に儲けられているベンチに
どっかりと座り込んだ。

秋になるとここは虫たちのオーケストラの会場になって、毎年秋

の集いなんてものもやっているのだそう。確かに、虫の音を聞きながら秋の夜長に浸るのも、日ごろの疲れを癒す絶好の機会だろう。ただ、今はまだ初夏。虫たちのステージまでにはまだ三ヶ月以上も早――

こういう形で台詞を削られるとは思っていなかったな。おっと、何が起こったのかを説明しなきゃな。直感の鋭い人ならわかると思うが、ステージが始まったのだ。無論、虫たちのステージではない。俺たちは徐々にライトアップされていくふれあい広場の中央に注目した。

特設ステージの上では、またしても俺たちの刺客らしき人の姿が。ていうか、勝手にステージ使っているのかよ。まあ、今更そこに突っ込むのはおかしいとわかってはいるが。

俺たちはステージの上に立っている男女を見上げた。女の顔ぶれのほうはよくわからないが、男は明らかに俺のクラスメイトたちの顔だった。あの五人、うちの男のクラスメイトたちの中では見事彼らでベストファイブを飾れるほどの美男だ。美男と言ってもそこのアイドルみたいなチャラチャラ系という感じではあまりない。田舎の美男子程度のレベルだ。美男五人組が集まって何をやらかそうっていうんだ？それに、後ろに控えているあの大量の女どもはいったい。

「へい、時代にのりきれていない老若男女のみんな！」

「ここはぼくたち須磨高スマップがつくった特別ステージ！」

「普段はねくらのその貴方！」

「こんやだけは別だぜ！俺たちとはでに踊りあおうぜイ！」

イエーイ、と後ろの女どもがやたらとハイテンションに声をあげる。

「さ、サトーちゃん……」

そのうち一人は諏訪の知り合いらしい。諏訪は何とも微妙な顔つきでステージの上で派手な衣装を着ている少女を訝しげに見上げている。

「いくぜ、ミュージックスタート！」

五人目が腕を大きく天に突き放ち、今が夜中とは思えないほど陽気な音楽がふれあい広場中に流れる。

Phantasma

「さあ、踊れおどレー！」

「皆もたのしく踊ろうよ！」

と言つて勝手に踊っているのはこいつらだけじゃないか。巻き込まれた俺たちは何が何だかわからないまま即席ダンスショーの観客になっていた……のも束の間だった。

「おわ！？」

「なになに！？」

俺たちはいつの間にか下に降りてきていたバックダンサーの女どもに無理矢理ステージの上げられてしまう。

「ヘイ、ボーイ！そんな顔してオレたちを見ていたっておもしろくないだろウ。楽しくよウきに踊るウゼ！」

「そ、そんなこと言われてもなあ。別に踊りたい気分じゃないし、夜中なんだからもう少し静かにしたほうが……」

「つべこべ言わずニさあ、オドレー！」

俺は五人の男たちに囲まれるや否や、無理矢理手足を捕まれ、振り回された。

「お、おいこら。よせ！わ、とと、こけるだろ！」

俺が男五人に捕まっているのと同じように諏訪もまたバックダンサーの女たちに捕まって無理矢理踊らされていた。しかし、人間やはり楽しい音楽というもに逆らえないものなのかもしれない。五分も経つと、俺たちはすっかりその気になってダンスを踊っていた。

近所迷惑なんてなんのその！

楽しければそれでいいのさ！

結局俺たちは数曲踊った後、須磨高スマップ（自称）たちとバックダンサーの女子生徒たちに別れを告げて、次のライブステージへと……じゃなくて担任を探すため校内へと戻ることとなった。

「楽しかったですねえ」

「ああ、超大満足だ」

俺たちは曲のテンポに酔いながらポテポテと再び校舎側へと戻っていった。

「結局あの人たちも私たちのクラスメイトだったわけだけど、今までみたいな感じじゃなかったね」

「いいんじゃないの？楽しかったし、無駄な汗と血を流さずに済んだし。おまけにこんなに気分がいいんだ」

「アハ、実は私もです」

諏訪はそう言って可愛らしく微笑んで見せた。

さてさて、十分遊んで、もとい戦った俺たちはその熱気を冷ますために再び食堂のテラスで風に当たっていた。さっきまでは湿っていてうっとおしかった風も今となってはとても涼しく感じられる。

「ほい、ジューズ」

俺は諏訪に自販機で買った冷たいジューズを渡した。

「これ、向井君が？」

「そ、俺のおごり。諏訪の好みを知らなかったから適当に選んだけど」

「うっん、ありがとう。向井君って割と女の子に優しいんですね」

「たいていの男は女の子には優しいものだよ。俺もそれに従っているだけ」

「それでもかまわない。私は今、向井君からジューズもらってとっても嬉しいから」

うっん、何とも青春真っ盛りのような会話だなあ。

向井君からジューズもらってとっても嬉しいから、だってよ。くう、たまらないねこの感じは。当たり前だと思ってしたことこんなにも嬉しくなるなんて思わなかったな。

乾いた音を響かせて、缶ジューズの蓋を取り中身を一気に飲み干す。

「ぶはあ、うめえ！」

実はこれ一度やってみたかったんだよな。俺の親父が仕事から帰

つてきて一人で晩酌するときによく言う台詞。何がぶはあだ、と馬鹿にしたものだがこうして汗をかいてみるとよおしくわかる、わかるぜ親父。

「向井君、親父くさしい」

「いい。この瞬間だけ俺は親父になる。これ、すぐくはまった」

そう言っただけ俺はもう一度缶ジュースの中身を一気に喉に流し込み、同じ動作をする。いやあ、たまらないね。

「向井君って変な人だね」

諏訪が笑いながら言ってくる。

「おいおい、たったワンアクションで人を変人扱いするなよ」

「だって変なもの」

諏訪はケラケラと笑う。笑いが止まらないところをみるとなんだかんだ言っただけいつもの今の動作が笑いのつぼに入っているんじゃないか。本当に可愛い奴め。

俺たちはその後も他愛もない会話をしながら月夜の歓談を楽しんだ。

俺も諏訪も数時間前と違って自然に向かい合っただけで会話できるようになっていた。

何だ、打ち解けるって意外と簡単なことじゃないか。ほんの数時間一緒にいるだけで、まして学校生活は今の俺たちと同じくらいの時間一緒にいるんだからすぐにでも仲良くなれるはずだ。俺たち二人をきっかけにクラスの皆がどんどん打ち解けていくといいよな。

「……………」

「どうした？」

さっきまでずっと明るく笑っていた諏訪の笑顔がピタリとなくなったので俺は何かまずいことでも言ったかと必死に数分前までの話の流れを思い起こしていた。

「うつん、なんでもない。ただね、さっきの須磨高スマップを見ていて思った。皆あんなに楽しそうにダンスを踊っていたのに、この戦いが終わったらそれも忘れちゃうのかなって」

そうか。所詮、これは狂った俺たちのクラス担任が作った虚構の出来事、つまり幻なんだ。夜が明ければきっと今夜のことまで忘れてまたいつも通り仏頂面をして学校にやってきて教室で一日を過ごすんだ。

「そう思うとさ、ずっとこのまま戦いが終わってほしくないなって思う」

諏訪は悲しげにつぶやいた。

「そうだな。確かに、昨日まで学年の中でもあんなに浮いたクラスだったのに今夜に限っては別物なくらい楽しかったよな。皆、明日になったら忘れちゃっているかもしれないと思うと悲しくなるよな」俺だって諏訪とのこの関係が虚構のものとなって、初夏の風にさらわれてしまうのは嫌だ。でも――

「でも、この戦いは終わらせないといけない」

「……うん」

諏訪は俺の言った結論に納得していないのだろう。渋々といった感じが否めないような頷き方だった。

Steeplechase

話の内容も冷めてしまったところで俺たちは再び残りの刺客を倒すために立ち上がった。

「あれ？」

テラスを去ろうとしていた俺の目に飛び込んできたのはグラウンドに小さく見える人影のようなもの。

「あんなところにいやがったか」

「探す手間がはぶけましたね」

「ああ、行こうぜ」

俺たちは空になった缶ジュースの缶をゴミ箱に捨てると、グラウンドに向かった。

グラウンドの中央に立っていた人影はやはり俺たちのクラスメイトだった。今回に限り男ではなく女のほうに俺は面識があった。といっても別に親しいわけではない。まったく見知らぬ間柄なのだが、その身長が目につくのだ。俺の推定だと、大体百七十中盤あたりだな。うちのクラスの男連中でもそのくらい高いと背の高さ順で並んだときに最後尾に近い位置に立つことになる。無論、彼女は女子の中では断トツトップで最後尾だ。まるでバレー選手並の高身長である。将来彼女の旦那になる男は可愛そうだな。

閑話休題、とにかくグラウンドには彼女ともう一人背の高さはそこそこの男が立っていた。

「俺たちを無視して楽しげに話していたナ」

「別に無視していたわけじゃないがな。気づくのが遅かっただけ」

「そのおかげでこっちは待たなくてもいい時間を無駄に待っていたのヨ」

「そんなことを言われても……」

諏訪は眉をハの字に曲げて小さく口を動かした。

「とにかくぐらうんども広いことだしバトルをするには絶好の場所

ダ」

「そうだな。それで、何をするんだ？お決まりの殴り合いか？」

「無粋だナ。周りをよく見てみる」

いちいち言うことが腹立たしいが、俺は奴に言われたとおりグラウンドを一周グルリと見回してみる。グラウンドには、所々にハードルやら綱やら平均台、跳び箱他各種類の用具が丁寧に一定の間隔で並べられていた。

「わかった力？」

「ああ。つまりは障害物競走ってわけだな。でも、ただの障害物競走じゃないんだろ？」

「いいえ、ただの障害物競走ヨ」

これは何とも拍子抜けな答えが返ってきた。いや、普通で考えたら拍子抜けなんてしない答えなのだが、今まで俺たちは五回も日常ではちよつと考えられないとんでもバトルを強いられてきたために何か裏があるのではないかと若干疑心暗鬼になっていたのだ。

「ただし、条件がある」

何だ、やっぱりあるんじゃないか。俺はなぜか内心ホツとしていた。勝負の途中に知らされるよりも今知らされたほうが安心できる。俺たち二人は中学も陸上部でここでも陸上部に所属していル」

「そんな私たちとあんたたちの実力差は雲泥の差、月とスッポン」
いちいち言うことが本当に腹立たしいが、ここはこらえて条件に耳を傾ける。

「そこで俺たちはあるーるを設けタ。お前らは今まで様々な奴らと戦ってきただろウ。その女を見てもわかるとおりいくつかの武器も隠し持っているはずダ。だから、お前たちには特別にその使用も許可すル」

「それに加えて距離のはんでもつけてあげるワ」

「この条件で我々と障害物競走で勝負ダ！」

何かこいつらの目がやたらと輝いている気がするののは気のせいだろうか。まあ、いい。どうせ逃げることはできない勝負だ。嫌でも

受けて立たなきゃいけない。

「いいぜ、受けたってやるよ。な、諏訪？」

「もちろん！」

俺の気のせいだろうか。諏訪の表情がいつになく自信に満ちているような感じがするのは。

「まずは我々から勝負開始ダ」

その声に俺は我に返り、男の後についてスタートラインにつく。

「距離のはんでは五十メートルだ。異論ハ？」

「ないぜ」

「向井君、頑張つて！」

激励してくれる諏訪に俺は片手を上げ、スタート位置につく。

Like the wind

「よーい……ごう！」

長身女のスタート合図と共に俺は全力疾走でグラウンドを走り、最初の障害に差し掛かる。まずは跳び箱。これは軽く飛び越せる。俺は跳び箱の中央に両手をつき、両足を開いて軽快に飛ぶ。

次なる獲物はバット。十回程回転して目を回した状態で走るといふあれだ。俺は一瞬後ろを確認する。くそ、やっぱり陸上部は半端ないな。五十メートルのリードなんてあつという間に縮めてくる。俺がバットで半分ほど回転した頃には既に相手もバットで回り始めていた。

やっぱり、陸上部相手というのは少し無謀だったか。俺の中で焦りが生まれる。しかし、ここで焦ってはいけない。焦れば焦るほど相手の思う壺だ。幸い俺には思う一つのハンデ、手持ち武器の使用が許されている。これを上手く使うんだ。

バットで回転し終えた俺はそのまま次の障害物である平均台に挑む。俺が仕掛けるのはここからだ。案の定、向こうは俺が平均台をわずかに進んだところで既に俺と肩を並べるところまで来ている。確かに速いが、多少さっきのバットで目は回しているはず。その隙をナイフで突くのだ。

俺は男に向かってナイフを突き出す。しかし、男は避ける以前に先に前へと進んでいくではないか。

しまった、完璧な誤算だ。俺は急いで平均台を渡ろうとするが、その焦りが余計に俺のバランス感覚を狂わせる。そして、俺が平均台を渡り終えた頃には相手は次の障害であるハードルに挑んでいた。俺も急いでハードルに差し掛かるものの距離は一向に縮まらない。それどころかどんどん離されていつている。

そして、相手は最後の障害、編み潜りを中ほどまで進んでいた。俺も全力で綱ぐりに挑むが、慣れていないと進むので精一杯だ。

（くそ、ここまでか）

四つんばいの姿勢で網の中を進む俺の手がポケットの中に入っているナイフに当たった。

これだ！俺は素早くナイフをポケットから取り出すと、網の天井をばっさりと斬った。そのまま網を抜け出た俺は最後の直線五十メートルで奴と並んだ。そしてそのままゴール。果たして判定は――「どろー！」

判定をしていた長身女が両腕を垂直に上げる。

「ちい、なかなかやるじゃないカ。まさか網をナイフで斬り破るとはナ」

男は悔しそうに舌打ちをして、そのままさっきまで長身女が立っていたスターターの位置についた。

「女子のはんでも俺たちと同じダ」

「わかりました」

諏訪は短く答えると、意気揚々にスタートラインについた。

「得意の中華鍋は使わないノ？」

「流石に今回は使えませんよ」

「でも、意外な切り札になるかもしれないヨ？」

「そうかもしれませんが、今回は使いません」

何を話しているのかは遠くでバテていた俺にはよく聞こえなかったが、どうやら諏訪の凜とした態度に長身女のほうが若干押され気味になっているのはわかった。

「よーイ……ごーウ！」

スタートの合図と共に両者が同時に地面を蹴って走り出す。

速い。速い、速い！速すぎる！

それは目の錯覚かと思えるくらい速いスピードだった。諏訪はスタートしてから相手に

追いつかれるどころか逆にどんどんリードを広げていた。障害物の扱いも慣れているのか

全く動じず、特に平均台に置いてのバランス感覚は見事の一言だった

た。長身女から大量の

リードを奪って余裕のゴールだった。

「あんた何者ヨ。この私がついていけないなんデ…」

後からゴールした長身女が荒い息を吐きながら悔しそうに諏訪を睨みつける。

「芹沢さん、三澤中の俊足といえわかりますよね？」

諏訪は涼しい顔をして言った。刹那、長身女の顔色が真っ青になった。スターターをし

ていた男も驚愕した面持ちで諏訪を見つめている。

「あんたが、もしかしてその諏訪なノ？」

長身女の問いに諏訪はにっこりと頷いた。

「勝負は私たちの勝ちですね。食い下がっちゃうのなら、私も向井君も容赦しませんよ」

俺も、そして敵の二人も直感で感じ取った。諏訪の笑みの中に含まれている燃える闘志のようなものを。

呆然と突っ立ったままの敵たちに合唱をしながら俺は先にグラウンドを後にした諏訪の後を追いかけた。

一方、グラウンドを去った後の諏訪はすっかり元通りのちよつと天然が入った女の子に戻っていた。

「久しぶりに走ったなあ」

大きく伸びをしながらそんなことを言う。

「諏訪、三澤中の俊足って何？」

先ほど話の中に出てきたその単語について質問すると、諏訪は「ああ、あれですか」と

普通に返してきた。

「あれは三澤中の陸上部の短距離選手の中で最も早い選手男女五人につけられる称号みた

いなものです。ちなみに女子の一番は私でした」

なるほど、それで納得がいった。だから長身女はあんなに驚いていたんだ。三澤中学校

といえば陸上に力を注いでいる中学校で常に全国大会にその名を連ねていた。そのベス

トワンに勝負を挑んで、あまつさえハンデをつけてしまえばまず勝てるわけがない。つま

り、あのハンデールを決めた時点であいつらの負けは確定していたも同然だったわけだ。

しかもあの速さならおそらく中華鍋を背負っていたとしても諏訪が勝っただろう。

そう考えるとあの二人には悪いことをしたような気がする。特に長身女のプライドはず

たずたに引き裂かれたことだろう。夜が明けて忘れてくれていれば大事にならずに済むが、

こればかりは運を天に任せるしかないな。

L o n e l y b o y

俺たちが今度向かったのは学校の西側、経済学棟へと向かった。須磨高には普通・経済・

音楽の三つのコースに分かれていて、そのうちの経済学科は主にこの棟での授業が集中している。

全ての校舎の中で最も機械化の進んだこの棟にはどの教室にもパソコンが備え付けられている。経済学科の人数も三学年あわせてそれほど多い人数ではないのでこれといって広い部屋というのはあまりないのでここはあつまりスルーできるだろう。と思ったのだが、実は広い部屋が二つほどあった。

生徒たちの情報収集場所、第一コンピューター室と第二コンピューター室だ。二つの教室あわせて百五十台のパソコンが置いてあるため広さは校内でも一、二を争う。しかし、コンピューターという精密機器が置いてある中で果たして今までのような闘いができるとは思えない。しかし、可能性がある限りは行ってみないことにはわからない。

まず、第一コンピューター室。扉を横にスライドさせ、月明かりを頼りに教室内を散策する。扉も強制閉鎖されなかったし、ここに刺客はいないようだ。となれば、残るは第二コンピューター室だが、正直あそこにはあまり行きたくなかった。第二コンピューター室は放課後になるとパソコン部の根城となり、一度入ればオタク全開の教室に早代わりする。

その噂もあるためか、実際第二コンピューター室でパソコンをいじる生徒はあまりいない。第二コンピューター室の片隅にはパソコン部のものらしき怪しげ、かつマニアックな備品がいっぱいおいてあるからだ。俺も話にきいただけで実際に見たことはない。まあ、どうせ今夜限りだ。あまり見たくはないが、今夜だけは仕事のため

に入らせてもらうことにする。

俺はそつと、第二コンピューター室の扉をスライドさせる。

「うん？」

教室の外から差し込む月明かりに照らされる一つの人影。こ、これはもしかやビンゴか？ な、なんか今から戦うのが嫌になってきた。

「よく来たね、二人とも！」

やけにハイテンションなその声と同時にコンピューター室の照明が一斉にまばゆく光り、毎度のごとく扉が強制的に閉鎖されてしまう。

明かりがついたことで声の正体が明らかになる。確か、教室ではいつも自分の席でひたすら読書をしていた奴だった。うちのクラスで最もネクラのはこいつだといってもおそらく言いすぎではないだろう。

「お前は……」

「フッフッフ、恐れをなしたか？」

「……誰だっけ？」

「ズコー！」

俺の見事なボケに予想通りのリアクションをしてくれるネクラ。

「同じクラスメイトだろうが！ 名前くらい覚えろよ！」

「いつも教室で暗い顔して本を読んでいるやつの名前なんて覚えられるかよ」

「向井君、それは言い過ぎなような……」

「言い過ぎなものか。当たっているだろ、ネクラ野郎」

「な、な、黙ってきいていれば図に乗りおつて。来い、僕と勝負しろ！」

「いいぜ。言つとくけど俺はお前みたいなへなちよこにやられるほどヤワじゃないぜ」

「野蛮人めが！ 勝負はこいつだ！」

ネクラはそう言つて眼鏡を直す仕草をとると、パソコンのキーを押した。刹那、俺たち

の目の前に巨大ロボットがどこからともなく現れたではないか。

「な、な、な、なあー!?」

こ、ここは一体なんなんだ。今のアニメイトはここまで進化しているというのか!? こんな立体ロボットが店内を平気でうろついているのっていいのかあ!?

「ハーツハツハツハ!見たか、我が愛機マグナスドラグーンの勇姿!」

あ、愛機ってお前……。大体勇姿っていうけどこいつただ立っているだけじゃないか。見てみる。諏訪なんてもう何が何だかわからないって顔をしているじゃないか。女の子にこんなマニアックなものをみせるんじゃないっての。

「さあ、お前たちも近くの席に座ってパソコンを操作しろ!学校のコンピュータの中に我が愛機たちのデータを盛り込んだ。不服ではあるが、今夜は僕のコレクション機体をお前たちに貸してやろう!こいつで勝負するのだ!」

何を言っているのか正直よくわからなかったが、俺たちは近くの席に座ってパソコンを立ち上げる。すると、パソコンの画面にはネクラが言うところの愛機の待ち受け画面が表示された後、なんとびっくり、ネクラが出てきたロボットと同じように俺たちが選んだロボットがパソコンの画面を飛び出して現れた。そして、その姿に一人エキサイトしているネクラ。はつきり言っただけ俺たちのことは最初から置いてけぼりのようである。ここまでやってしまうと啞然というよりはあまりの衝撃映像に呆然としてしまう。

画面からでたロボットたちの代わりに待ち受け画面にはいろいろな計器が画面に表示された。

「ふむふむ、向井の機体は削岩専門機体ザクシューター、そして諏訪の機体は超科学試作型機体ゴンザレムか。パワー型にスキル型か。よおーっし!」

ネクラは一人ぶつぶつと何かをつぶやいた後、やたらやる気満々に掛け声なんかを発している。なんか、もう負けてもいいような気

がする。その後でこいつを袋叩きにすれば解決できる問題だし。

Metal heart

「おらおらーいくぞお！」

巨大ロボの戦闘は序盤からネクラに押されっぱなしの状態で俺たちのロボットの活動エネルギーがものすごい勢いで減っていった。

「そらそらー、エネルギーがなくなって大破しちゃうぜえ！」

そんなことを言ってもどこをどう触ればいいのかわからない。とりあえずアーケードゲームのようにキーボードをいじるが、思うように行動ができない。手加減なしのネクラの攻撃を防御することもままならなかった。とりあえず、矢印キーで移動させることができたことはわかったので緩い攻撃はかわせるようになってきたが、それだけで形成を逆転することは難しい。

「向井君、Dのボタンを押しっぱなしにしてみてください。防御ができますよ！」

サンキュー、諏訪！俺は早速向けられてきたパンチ攻撃をDキーで防御する。なるほど、防御を始めると斜め右下のバーが減っていくのか。このバーがゼロになるまで防御は可能ってわけだな。攻撃を防御されて焦るネクラに俺はAキーでネクラの機体にカウンターパンチを送り込んだ。ネクラの機体が大きく吹き飛ぶ。

「くそう、よくもやったな！」

ネクラはキーボードを叩いてすぐに体勢を整えると、ジェット移動で俺たち二人の機体に接近してくる。

くそ、何か技はないのかこいつ。

俺は適当にキーボードを叩く。すると俺の機体はネクラの攻撃をジャンプで避け、そのまま股下に装備されているドリルでネクラの機体をぶちぬく。

「ぐわああああ！」

しかし、この技の終わりは以外に早いもので、技が終了すると勝手に相手との距離をとってしまった。この隙を当然ネクラは見逃す

はずがなかった。すぐさま反撃と言わんばかりに——実際には言っていたが——奴の技が炸裂する。これにより、俺のロボットのエネルギーがわずかに数ミリのラインまで下がってしまう。

「ヒヤハハハ！ 後一撃で向井は終わりだなあ！」

はい、その通りです。早く終わらせてください。一刻も早く……。一方諏訪はキーボードを何度も叩くものの一向に技がでない。機体を動かすだけで精一杯のようだ。

こりゃあ、本気で全滅するか。諏訪のロボットのエネルギーはまだ五センチくらいバーの長さが残っているものの、あの調子ではいつか近いうちにネクラの決定打をもらうだろう。しかし、あいつが勝ったらさぞかしうるさいことだろうなあ。『僕の勝ちだあ』とか『見たか愚民ども！』とか言いそうだな。そして、最後にうざったいほどの高笑い。

うっ、それだけは勘弁してほしいかも。負けた後に思いっきり奴を殴れてしまうではないか。

俺がそんなことを思っている横で諏訪が座っていたパソコンの画面がまばゆく輝いた。

ネクラの顔が恐怖に歪む。

俺は自分の席を離れ、諏訪のパソコンの画面を覗き込んだ。

「何をしたんだ！？」

「わ、わかんない！ 適当に押してたら画面が急に光って……」

こ、これはもしや格闘ゲームなどを始めたばかりの初心者が生み出す驚異のビギナーズラックではないか？

画面には『殲滅 ギンザレムストライク！』と出ていたが、その後のギンザレムのモーションからしてこれはまさしく——

（対ネクラ専用 みのりんクラッシュャーだ）

意味もなく星マークを入れてみたが、これくらいの茶目っ気は許されてもいいだろう。

全てを焼き尽くすレーザーがネクラの使用機体を一撃で葬り去った。

「ぐひよええええ!!」

爆発の圧力を受けたネクラの体は椅子から放り出され、そのまま机の角で頭を打って伸びてしまう。まあ、ネクラらしい栄誉ある死に方だ。

「すげえ、一撃必殺技かよ…」

俺はしばらくパソコンの画面にでかかと表示されている『DE STORY!』の文字に啞然としていた。

「向井君、これって相手を倒したことなの？」

超必殺技を出した後だというのに事がさっぱりわかっていない諏訪はきよんとした表情で俺に問いかけてくる。

これは俗に言うあれだろう。素直な心の勝利というやつだ。怪訝そうに俺を見上げる諏訪に俺はただただ苦笑を浮かべるだけだった。伸びているネクラはそのままに俺たちはさっさとコンピュータ室を引き上げた。ただでさえ暗い中でパソコンの画面を見続けたせいで、目がすっかりチカチカしていた。諏訪は最後までネクラを介抱したほうがいいのではないかとねばったが、俺はもう一秒たりともこんなオタク部屋にこもる気にはなれなかった。

そのまま経済学棟を後にした俺たちは次の刺客を探して夜の校舎を彷徨う。

「なあ、諏訪…」

俺は西に傾きつつある月を見上げながらつぶやくように言った。

「なんだかんだ言ってるあんたと一緒にクラスの連中と戦うのは楽しかった。あんたには何度も助けられたよな」

「どうしたの、急に」

諏訪は照れているのだろうか。少し声が上ずっている。

「さっき、あんたはこの戦いが終わらなければいいなと言っていた。それは俺も同じ気持ちだった。俺だって、この楽しいときがずっと続けばいいと思っていた。でも、これは幻なんだと割りきろうとしていた」

「……………」

「でも、やっぱり割りきれないや。諏訪と一緒に戦っている今を明日には幻だなんて決めつけることは俺にはできない。少なくとも今夜の一件であんたとは戦いを通じた戦友になれたと思う。この関係は明日になっても消えることはないと思う。だからさ、もし他の奴らが今日のことを忘れていたとしても俺たちだけは今日このときのままの間柄でいよう。そして、俺たちを中心にクラスの奴らとの友情を育てていこう！俺たちから始めていこう」

これが今の俺の正直な気持ちだった。今の俺にはもうさっきまでと違って割りきった気持ちはどこにもない。なんだかんだ言っても楽しかった今夜の出来事を幻になんてしたくないんだ！

諏訪はゆっくりと夜空を見上げた。

「私もこのままいつもの日常に戻るのは嫌。そうなるくらいだったら、いつそのこと学校を辞める」

諏訪の衝撃宣言に俺は両手の拳を固く握った。

「そのつもりでいたんですよ、さっきまでの私」

夜空を見上げていた諏訪はどこか自嘲じみた表情で笑った。

「でも、向井君の話を聞いていたら何だかその考えが馬鹿らしくなってきた」

諏訪は一呼吸間をおいて、今度はどこか爽やかさを感じる笑みを浮かべて続けた。

「そうだよな。誰かが動くのを待っていちゃいけないよね。少なくとも私と向井君は友達になれたんだもん。私たちからみんなの関係をスタートさせていけばいいだけの話ですよ。何でこんな簡単なことに気づかなかったんだろう私」

「気づかなかったんじゃない。気づこうとしなかったんだ。自分が傷つくのを恐れていたから」

「そうかもしれない。でも、もう大丈夫。今の私は一人じゃない。

向井君がいる」

「俺にも諏訪がいる」

「私たちが」

「俺たちが」

「「皆の仲を取り持つ役を演じるんだ」」

戦いという、今の世の中には unnecessary なもので関係を培った俺たちだからこそ――

「だからこそ、やらなくちゃ」

一気に士気を高めた俺たちはその足で、おそらく担任がいるであろう放送室へと向かった。というかなんで今まで気づかなかったのだろうか。刺客を倒すよりも何よりも真っ先にここにくれば担任と直接対決ができたはずなのに。俺たちは放送室と書かれた部屋の前にたどり着くと罨が張っていないかどうかを確認して扉のノブをひねる。

扉の軋む音を聞きながらゆっくりと中の様子を探る。

「……もぬけの殻か」

「最初にスピーカーを使ってアナウンスをしてきたからってつきりここだと思っただけで予想がはずれましたね」

諏訪も拍子抜けしたと豪語する一方でどこか安心したような表情を見せている。やはり現実世界でも架空世界でもラスボスと対峙するときというのは無意識に緊張するものなのだろうか。それでも俺たちは一応放送室の中に担任の手がかりがないかを探す。

ふと、机の上に置いてある一枚のルーズリーフが目にとまった。

「なんだこりゃ」

拾い上げて読んでみる。

『二人ともよく頑張った。残りの刺客は八名。さあ、今すぐ体育館にGo！追伸、お二人様一回限り』

「なんだこりゃ」

「どういう意味？」

諏訪も首を捻っている。そりゃ、俺たちがコンティニューでもない限りバトルは一回限りだと思うが。とにかく残る刺客はあと八人……ていうかまだ八人もいるのかよ。いやいや、俺たち二人を除いたクラスメイト三十四人を順に倒してきてその残りが八人なら残りには四分の一以下ってことじゃないか。ポジティブ、ポジティブ！「体育館に行ってみよう。そこにいるとわざわざ書いてあるんだし」

「そうだね。でも、畏つてことはないかなあ」

諏訪が不安そうにつぶやく。でも、その時はその時さ。今の俺たちにはもう並大抵の畏は通用しないことだしな。

それを言くと、諏訪も「それもそうか」と笑った。最終決戦に向けて、リラックスできているじゃないか。この調子なら案外ゴールはすぐかもしれない。

俺たちはルーズリーフに書かれている通りに再びスタート地点の体育館と向かう。本校舎からならいちいち外に出るよりは渡り廊下を渡っていったほうが早いな。二階に上がって、三年生の教室を中ほどまで通り過ぎ、そこから体育館へと続く渡り廊下を渡ればすぐ体育館のステージにたどり着く。

学校生活も二ヶ月が経ち、すっかり渡り慣れた道なのだが――
「まずは二人……」

俺は正面に立つ二人の男子生徒を前にして静かに足を止めた。

Battle 5

「よくここまで辿り着いた。この渡り廊下を渡りできれば先生の待つ体育館のステージに行ける」

「しかし、ここでお前らはゲームオーバーだ。俺たち、先生直属の精鋭によつてな」

「先生に何を吹き込まれたかは知らないけど、くだらない戦闘員になり下がるくらいなら普通に学生やっているほうがまだマシだと思うぜ」

「私たちは早く先生に会いたいんです。どいてください!」

「そう言われて通すと思うか?」

「思わない!」

「思いません!」

俺と諏訪は同時に武器を構えた。同時に敵も武器を構える。といっても一人はどうやら素手であるようだ。もう一人の得物は俺と同じナイフ。素手・ナイフVSナイフ・中華鍋なら武器の優勢度合いとしてはこっちに分がある。

どこかで風にあおられた缶が地面に落ちる音がした。そしてそれが戦闘の合図。互いに間合いを確かめ合っていた俺たちは同時に渡り廊下の床を蹴った。

「まずは俺が行く!」

この狭い渡り廊下は二、三人が立っているだけでいっぱい。そんなところで二人が同時、特に諏訪は中華鍋という大きな武器を持っているため同士討ちになりやすい。それを避けるためだ。

「たいした自信だな」

素手の男が鼻で笑う。

「素手がナイフに勝てると思うなよ!」

俺は勢いよく奴の顔面に向けてナイフを突き出した。

「甘いわ！」

奴の懐に突っ込んでいた俺はそのままナイフを持った利き手を受け流され、そのまま腕をつかまれる。

一瞬、上下が逆になった。それが投げられたということに気づいたのは背中からコンクリートの床に叩きつけられてからだだった。声にならない痛みが襲いかかる。流石にコンクリートに背中から叩きつけられたらうめき声すら出せないな。しかし、上下が逆になったおかげで少しが見えた。もう一人のナイフが男の肩を踏み台に背中を飛び越えていくのを。

「上！」

痛みと戦う中で俺が何とか出せた声はその一単語だけだった。諏訪はそれが自分に襲い

掛かっていることだと気づいたのか咄嗟に中華鍋を斜め上に構える。刃物が鉄に接触し、甲高い音が響く。

「チイ！」

ナイフは短く舌打ちをするが、諏訪はその一瞬の隙を見逃さなかった。すかさず中華鍋でナイフの左腕を叩いた。急な動作のため諏訪自体も動けについていけてなかったからあまり威力はないだろうが、それでもナイフに少しくらいはダメージを与えたはずだ。ナイフは今度こそ後ろに飛び退き、再び素手の男に隠れるように真横より後ろ目に立つ。

「いいーラウンドだったな……」

素手の男は低い声で笑う。

「第二ラウンドも楽しめそうだ」

「あいにくとこっちはさっさと体育館に行きたいんでね」

俺は軽やかに床を蹴った。

「勝ちを急ぎすぎだ」

「ああ、学習能力は猿以下だな」

素手の男はどっしりとした構えを見せ、再び俺を投げようと迎え撃つ。しかし、そんなことは俺だってわかっていた。だから、今度は後ろに諏訪をついてこさせている。俺がナイフで素手の男を斬ると見せかけて、その場にしゃがむ。

「何!？」

見事に素手の男の手は空を掴む。

「今だ!」

「!!!」

二人の敵は気づいた。俺の真後ろで諏訪が中華鍋を大きく背中まで振り上げていることを。しかし、気づくのが遅い。そのままのりんスイングで砕け散れ!

「行きます!」

諏訪は大きく振り上げた中華鍋を奴らに向けて振り下ろす。今までの相手だつてこれで一撃K・Oしてきたんだ。こいつらだつて例外ではないはずだ。しかし、中華鍋が捕らえたのは素手野郎の体ではなくただの空気。つまり、失敗だ。勢いあまったみのりんスイングの威力を静止するだけのパワーがなかった諏訪はそのまま中華鍋を手すりに強打させてしまう。

「!!!」

痛みにならない感覚が諏訪を襲う。それでも中華鍋を離さなかったのは正解だった。カウンターとばかりに二人の男が同時に俺たちを攻撃してきた。俺はジャンプで避け、諏訪は素手野郎が投げようと掴んでくるその手を中華鍋で何とか凌いだ。

「なるほどな。今の特技に賭けていたというわけか」

再び距離をとった敵は今の俺たちの行動を分析するようにつぶやいた。

「しかし、残念だったな。こんな狭い渡り廊下では一度は必ず勢い余った力でこのような手すりに中華鍋を当ててしまい、その振動がお前の腕に伝わる」

ナイフ男はそう言つて手すりを軽く叩く。

「ついでにいうと、お前のそれは構えるのに時間がかかるし軌道も読みやすい。俺たちに通用するような技ではない！」

「諏訪、どのくらい持ちそうだ？」

敵の説教を聞く一方、俺は先ほど腕にダメージを受けた諏訪に小さな声でささやいた。

「かなりきついです。さっきの一撃で今まで中華鍋を支えてきた分の痛みも出てきてしまっ……」

マジかよ。今までが大丈夫だったから忘れていたがここに来て、ダメージが一気に諏訪の肩と腕にかかってしまったのか。

「今度の作戦は決まったか？」

敵の二人は余裕しゃくしゃくといった表情だ。

くそ、ここまで来て力尽きちまうのかよ。俺一人じゃ奴らに特攻しても素手野郎に投げられ、その隙についてナイフ男がから空きの諏訪の元へたどり着いてしまう。

一体どうすればいいんだ？ どうすればこの悪状況を打破できる？ 考えろ！ 考えるんだ。動きで勝てないのなら後はこの頭の中に浮かんでくる頭脳プレー——

に掛かってくる。とにかく卑怯でも何でもいいから奴らの隙を——

「やああああ！」

「何！？」

今のは俺とナイフ男の声だ。そして俺の横を走り抜けていく一人の女の子。

「よせ、諏訪！ 無防備に突っ込むな！」

無防備に突っ込めば俺と同じように奴に投げられる！

「ふん、中華鍋を両手で構えていれば投げられないとも思ったか。甘……い！？」

今の行動は俺にも信じがたかった。

素手野郎に投げられる直前、諏訪は渡り廊下の滑りやすい床の性質を利用してスライディングしたのだ。そのまま素手野郎の股を抜け、ナイフ男の横を滑り去っていった。そしてすかさず後ろに回り

こみ――

「よせえ、すわああああ!!」

しかし諏訪は構えをとかなかった。一瞬だが、諏訪の笑顔が垣間見れた。

「向井君、しっかり伏せていてくださいね」

諏訪は微笑みながらそう言うと、もう限界に達している腕を大きく振り上げた。

「せーのぉ……吹っ飛べー!!」

諏訪はがら空きのナイフ男の背中にみのりんスイングを叩き込んだ。

「ぐげえ!!」

「よ、よせ!来る……ブフウア!!」

素手野郎はナイフ男との瞬間、大きく舌をかんだに違いない。そのまま悲鳴もあげずにナイフ男と二人、狭い渡り廊下の手すり・天井を数回バウンドした後、宙に投げ出された。奴らの落ちた先は校長が趣味で育てているらしい農園の土の上だった。この高さからでも死には至らないだろう。校長には悪いが、二人の命を助けるのに役立てたんだ。畑は死んでも何度でも助けられるが、人の命は失われたら二度と助からない。

「人の命……」

そうだ、諏訪は!諏訪は無事なのか!?

俺はぐったりと倒れている諏訪の体を抱き起こした。

「しっかりしろ!起きてくれ!」

肩を揺さぶると、閉じられていた諏訪の目がゆっくりと開いた。

そして、弱々しく笑いながら右手でピースした。

「我ながら、いい作戦だったでしょ?」

「馬鹿野郎!なんて無茶をするんだよ!」

「えへへ、右腕肉離れしちゃった……」

「馬鹿野郎!そんなになるまでどうして戦ったよ!どうして俺に任せてくれなかつ

た？」

「だって向井君、必死に考えていたわりには行動を起こさないんだもん。まずはやってみようとするチャレンジ精神が大事だと思うなあ……」

「それで死んだら意味ないだろうが！クラスの皆の仲を取り持てるのは俺たちだけなんだろう！どちらかが死んだら駄目なんだよ！」

「えへへ、嬉しいなあ。向井君、そんなに私のことを必要だと思ってくれてたんだ」

「当たり前だろうが。あんたと俺は大切な戦友だ！」

「……………」

「どうしたんだ？」

「諏訪君ってやっぱり変わった人だね」

「何だよそれ？」

「なんでもないよ……」

「まあいい。とにかく先へ進もう。俺におぶされ」

諏訪は小さく頷き、俺の背中にゆっくりとおぶさった。渡り廊下を進む途中もやはり俺は彼女に『変な人』扱いされていた。

Strong solidarity

長い渡り廊下を渡り、俺たちは体育館二階のステージに再び戻ってきた。最初と違うところは体育館にはわずかながら明かりが灯っていることだった。しかし、この薄明るさが逆に不気味さを増してもいた。

「誰も、いないのか？」

辺りを見回すが人の姿はない。天井から落ちてくる気配もないし、ステージの裏に隠れているのか。

「向井君、気をつけて……」

背中に負ぶさった諏訪が小声でささやく。

わかっているさ。俺はその一言を頷くことで諏訪に返した。

『よくぞここまでたどり着いた！』

「……！！？」

またか。俺たちはステージ中央に設置してあるスピーカーに体を向けた。

『……なんて偉そうなことを言うのはやめておこう。今時の悪役に流行らないし、実際君たちの戦いぶりはこの目で散々焼き付けてきたことだしな。渡り廊下の精鋭もよく倒したものだ。足場は滑る、道幅が狭い、そして何より彼らが意思を持つ下僕たちの中では一番強いという悪条件にもかかわらず』

「意思を持った下僕？」

『そう、君たちは気づいたかどうか知らないが、我が下僕たちは強弱こそあるものの完全に操ることはせずに意思を持たせていた。そのほうがよりドラマがおもしろくなるだろうと思っただけ。予想通りいいドラマを見させてもらったよ。おかげで少しはクラス内の親睦も深まったのではないかな？』

相変わらず嫌みっただらしい調子で担任は話す。

「先生！私たちが倒してきたクラスの皆は今日のことを覚えている

んですか！」

俺の背中の上から諏訪が質問した。確かに、それは俺も聞きたかった大事なことの一つだ。戦ったものの中にはひどいやられ方や、プライドを傷つけてしまった恐れのある者もいるからな。

『残念ながら今日の記憶は彼らに残ることはないだろう。意思は持たせたとはいえ、戦ったことを記憶するまでには至らない程度だ』
「そうですか……」

がっかりしたような安心したような微妙な感じた。バトルの中では一番楽しかったあのダンスも須磨高スマップ（自称）も今日のことは全て忘れてしまうわけだ。

『話を元に戻すが、これから私と戦ってもらおう』
そうだった。いつまでも微妙な雰囲気になら流されている場合ではなかったな。ここはラスボスの間なんだからな。

『が、その前に残っている生徒六人と戦ってもらおう』
スピーカーからはしっかりと先生が指を弾く音まで聞こえてきた。そういうところは無駄にラスボスっぽいよな。

闇の中から生まれ出てくるように最後の六人が姿を現した。しかもよりによって全員女子ときたか。しかし、諏訪はもう戦えない。ここは俺一人で彼女たちを気絶させる程度に傷つけないといけないわけか。うゝむ、やはり女の子と戦うのは抵抗があるな。

『女の子は傷つけない主義の向井君に一つ朗報だ。彼女たちには意思は持たせていない』

「！？」

『彼女たちは私が揃えた意思を持たぬ純粋な殺人メカだ。もはや、女であるという概念は捨てたほうがいい』

「殺人メカ？」

『そう。人を傷つけることを喜び、人の血をなめることを極上の楽しみとするまさに彼女たちは悪魔の生まれ変わりなのだ！』

「……………」

『臆して声も出なくなっただか。少々興ざめだがまあよい！我が下僕

たちよ！立ちほだかる敵を殺せ、殺せ殺せえ！」

スピーカーから流れる狂った雄叫びに反応して六人の女子生徒が同時に木の床を蹴って突進してくる。

「うるせえ！！」

スピーカーから流れる狂った悪魔の声にも勝るほどの大声に女子生徒たちも思わず動きを止める。俺はそのくらい今おかれた状況に腹が立っていたのだ。

「黙って聞いていればべらとくだらない能書きをたれやがって！何が『彼女たちは意思を持たぬ殺人メカ』だ。あんた、完全にイカれてるぜ！人の心を踏むにじっただけならいざしらず無抵抗の彼女たちを勝手に殺人メカ扱いするんじゃないか！」

「向井君……」

「先生、昨日までのあんたのその純粋な心はどこへ行ったんだよ！昨日までのあんたはいろいろ俺たちに提案を並べて少しでも皆を仲良くしようと努めていたじゃないか。校長や学年主任に叱られても叱られても、自分の思った理想像を追い続けていただろう！俺は少なくとも俺はそんなあんたは嫌いじゃなかったし、それなりに好感を持っていた。それなのに、今あんたがしようとしていることは何だ。俺たち生徒を力任せに言うこと聞かせているだけじゃないか！教師がそんなんで生徒がついてくるわけないだろうが！」

「……」

「どうしちゃったんだよ。早くいつもの先生に戻れよ。何を言っても知らんぷりしている俺たちを見て眉を八の字に曲げて困っているいつもの先生に戻れよ！」

「ほざけ！」

「……」

「我が下僕たちよ。奴の虚言に何を迷っている！さつさと始末しろ！」

「向井の言っていることは虚言なんかじゃない！」

突然聞こえた叫びに、俺も諏訪も体育館の入り口に顔を向けた。

「本田！それに安島も…？」

「先生、向井君の言うとおりだよ。早くいつもの先生に戻って下さい！」

本田と安島は懇願するように叫ぶ。そして、俺たちの間に割って入ってきた。

「いろいろとすまなかったな向井、諏訪！」

「僕らも闘いに参加するよ！」

こいつら……。

『お、お前たち！なぜ闘いの記憶がある！？私の魔法で操っていたはずなのに…』

スピーカーの奥から震えたような悪魔の声が響く。

『ええい、二人増えただけで何ができる！我が下僕たちよ、叩きのめせ！』

悪魔の声で再び六人が戦闘体勢に入った。くそ、この程度じゃまだ彼女たちの自我を取り

戻すに至らないのか！

「二人だけじゃない！」

今度は体育館の側面扉から声が聞こえた。

「サトーちゃん！それに芹沢さんも！」

「おまたせ、実ちゃん！須磨高スマップ、バックダンサーズ第一メンバー佐藤都子たいたい

ま参上！」

佐藤はそう言って敬礼のような決めポーズを取る。

「諏訪さん！種目は違うけど、同じ陸上を嗜む者同士。私も協力してもいいよね？」

諏訪は俺の背中に負ぶさったまま、右手の親指をピツと立てた。

『く、くそ。一体どうなっている。何が起こった！』

俺にも何が起こったのかはわからない。でも、一つだけ言えることがある。ここに

こいつらは皆、俺たちと同じ気持ちだったということだ。

「先生、早く元に戻れよ！俺たち皆先生の復帰を待っているんだぜ！」

『う、ウウ…』

「先生、もうこんなことはやめましょう。そんなことをしなくても私たちの絆はここに完成したじゃないですか」

『グ、グググ…』

どうやらこいつらの声援でかなり悪魔は動揺しているようだ。周囲を囲む女子生徒たちの動きが鈍くなっている。

「先生！」

「先生！！」

「先生！！！！」

全員でスピーカーの向こうにいるであろう悪魔に向かって叫んだ。ボンツとスピーカーが爆発した。刹那、俺たちを囲んでいた女子生徒たちの意識が一斉に途絶えた。

「！！！」

「…いや、大丈夫だ」

彼女たちの手を取り、本田はつぶやいた。

「気を失っているだけだ。どうやら先生がかけていた呪いがとけたみたいだな」

「よかった…」

俺の背中の上でホツと安堵の息を吐く諏訪。

「こしゃくな真似を……すぐにそいつらもお前たちの後を追わせてやるわ！」

「「「！！！！」」」

俺たちの目にはそれが瞬間移動をしたように見えた。先生の体を乗っ取った悪魔は怒りの形相で俺たちを睨みつける。

「芹沢、佐藤。諏訪を頼む」

「オツケイ」

「わかった」

女子二人は小さく頷くと、俺の背中からゆっくりと諏訪を引き取った。

「向井君、ごめんね。最後の最後に役に立てなくて…」

「何を言っているんだよ。あんたには今まで散々世話になったじゃないか。最後くらい男

らしくビシッと決めてやらないとな」

俺は両手の指を鳴らしながら先生と対峙する。

「かつこいいこというじゃねえか向井」

「俺たちも仲間に入れてもらっていいよな？」

そう言って自ら戦いの場に立つことを志願した二人。気持ちはありがたかったが、俺の

気持ちはもう決まっていた。

「お前らは下がっていてくれ。先生とは俺が一对一でケリをつけたいんだ」

「何言っているんだよ。一人でどうにかなる相手か？」

「そうとも。力を合わせて戦おうぜ」

なおも食い下がろうとしてくる二人に俺は小さく首を振った。こればかりは、この気持ち

ちばかりは譲れない。

「……わかったよ。好きにしろ」

「芝居のカーテンコールは向井君で閉めてもらうことにするよ」

おっと、意外と予想外だったな。もう少し食い下がってくるのかと思ったが。やっぱり

その辺りはまだ入学して二ヶ月だし、気を遣ったのかもしれないな。でも、とにかくこれ

で俺は先生と一対一で勝負ができる。

「せっかくの申し出を断っていいのか？君相手なら私は一分以内で終わらせるつもりだ

「が？」

「なら、その一分で先生を奪い返してみせる！」

「見上げた魂だな。やってみるがいい！」

そうして最後の戦いが始まった。

Last dance

先生を乗っ取った悪魔の攻撃は格闘技と、時折繰り出してくる不思議な力がメインだった。格闘技のほうはなかなかの使い手で、ナイフ程度の武器など物ともしないスピードと手足の破壊力は絶大だった。しかし、ここまで来たんだ。もう負けられない。俺の力の全てをこの戦闘につぎ込むんだ。

「これを避けられるか!？」

先生は足元に球状のエネルギーの塊を作り出すと、それを俺に向かって何本も蹴ってきた。

動きに一定の間隔があるから、それにあわせてよければなんてことはない。

「!？」

しかし、その一瞬の油断がクリティカルヒットを招いた。食らってからわかったのだが、このボールのスピードは徐々に速くなっていったのだ。相手に気づかせないほどゆるやかにスピードを上げていく技術はやはり人間業ではない。そもそも正体のわからないエネルギーを球状に打ち出すこと自体既に人間業ではないのだが。

悠長に解説をしている場合じゃないな。俺は木の床から素早く起き上がると、スピードの速くなっているボールを避けながら先生の懐に向かって飛び込んだ。

「君のそのパターンも既に私の頭の中で攻略済みだよ。そのまま飛び込んできたらどうなる……か!？」

もちろん、ただ突っ込むだけで俺の攻撃は終わりじゃない。突っ込むだけだったら相手がどう反応してくるかも計算した上での特攻だ。案の定、そのままみぞおち目がけてナイフを突き出してくるとふんでいた先生はみぞおちを中心にガードを固めていたが、俺がみぞおちを避けて背後に回ったことでその防御は役立たずになった。そつ、俺は最初背後に回ることを承知でわざと直線的に移動をし

ただ。そして、相手の間合いに入ったところで姿勢を変えて背後に回りこむ。

いいぞ、上手く誘い込めた。

「でやややや!!」

俺は先生の背中にナイフではなく、パンチを繰り出せる限り繰り出した。最後はブローパンチで先生を木の床目がけて吹き飛ばした。

本田たちが『おお!』と歓声を浴びせる。

「……それで?」

膝をついた先生は俺に背中を向けたまま顔だけをこちらに向けた。怒りに歪むという表現が的確だろうか。先生の目は鋭い刺のように細かった。

「お前がいくらこの肉体を攻撃したところで私には何の痛みも感じぬ。痛みを感じるのはこの体の持ち主のみ。お前はこの教師に止めをさせるか!? 生徒が教師を殺せるか!?!」

「……………」

「殺せまい! 殺せるはずがあるまい!? ハーッハー! 私の勝利は君たちの実力云々の前に最初から決まっていたのだよ! ハーッハーッハー!」

「……!?!」

突如、先生の体に異変が起きた。さっきまでの怒りに満ちた表情は、いつもの自信のない先生のものに変わり、声も先ほどまで俺たちが話していた悪魔のものとは違う、いつもの先生のものになった。「そ、そう、なにもかも……思い、通り、に、なると思わないで……くだ、さい。悪、まさん……」

「先生……?」

「……先生!!」

本田たちが膝をついてうずくまっている先生の元へと駆け寄る。

「む、か、い君……それ、から誅、わさん。二人、には……いろいろと、めいわ、くをおかけ……しま……」

「先生！」

「喋らないでください！」

「わ、たしが……君たちの、ことを案じ……ていた、ところ……を……悪魔に、つけこまれて……生徒に、酷い、ことを……」

「それはもういい！もういいんです！」

俺も必死に叫んだ。

「だから、悪魔なんかには負けないでください！こいつを倒せるのは先生だけなんですよ！」

「が……グ、グへ、ヘエー！し、消、滅させ、られてたまるもの、か……。せつか、ク居心地のいい……人、間のここ、ろにはいれ、た……人、に」

「貴方の、口車に……乗った私が、馬鹿……だった。クラスの関、係は……他人のち、からを借りて、つくる……ものじゃ、ない。きよう……しとせい、とが一体となって……。自分を、押し付け……て、はいけ……ない」

先生は心の中で必死に戦っていた。俺たちには、それを固唾を呑んで見守るしかなかった。でも先生、その通りだよ。どちらか一方の偏った愛情でクラスの友情は育めない。全員が一体となって初めてそれはクラスになるんだ。

「ひぐ！？い、やだア！？おでばじにだぐな、い！じにだぐ……」
断末魔の雄叫びとはまさにこういうことをいうのだろう。

悪魔は先生の心の光に撃たれて死んだ。最後の最後までもがき苦しんで。

Till the end of time

文化祭当日。

本日はお日柄もよく……なんか違うな。そりゃ運動会るときにいう言葉か。まあ、そんな挨拶はどうでもいいな。

あれから一週間が経過した。

悪魔を倒した俺たちは、体育館にやってきたクラスメイトたちと合流した。聞くところによると、どうやら戦いの記憶は全員が一片も忘れることなく覚えていたらしい。

あれほど自信たっぷりに闘いの記憶は残らないだろうと宣言した悪魔は結局のところ最後まで誤算だらけの作戦を俺たちにぶつけて挑んでいたんだな。

まあ、悪魔についてのことで今俺たちが君たちに言えるのはそのくらいだ。先生もあの事件以来いろいろ悪魔について調べているらしいのだが、何しろ非現実的な話だし、何かわかったとしても今後の俺たちの生活には役に立たないことばかりだろう。しかし、悪魔と戦ったときの記憶はこの先十年、二十年と俺達の記憶に残ることだろう。そして、同窓会が何かで会うたびにあの日の話題が出てくるのだ。まるで、今こうして高校生活を過ごしているのと同じように。

文化祭当日なのに悪魔の話ばかりしていてもおもしろくない？でも、学園祭の話はもつと面白くないぜ。やっぱりいくら団結が深まっても一週間で演劇はどうにかなるもの

じゃない。とはいえ、この一週間の俺たちはかなり充実していたね。クラスの委員長――

実は芹沢と一緒に勝負を挑んできたあいつがそうだったのだが――を中心に全員が話に参

加して積極的に意見を出し合って、何を上演するかを決めて――。繰り返すが本当に充実

していた。俺の学校生活にもやっとこさ学校生活に刺激が出てきたようだ。

文化祭は大失敗をしちゃったけど、その分俺たちの絆は他のどのクラスをとっても負けないくらい、もっと大きくいうなら学校一絆の深いクラスに成長したと思う。

文化祭が終わって本格的な夏が訪れようとしている中、今クラス内では夏休みを利用してクラスの皆と先生とでキャンプに行く計画を立てていた。正直、ここまでクラスの輪が広まるとは思っていなかったけど、俺はそんなこいつらと過ごす毎日が好きだった。もう以前までのように学校に行くことがかつたるいとも思わない。今は――

「向井くん！たまには一緒にお弁当でも食べませんか？」

「ああ、ちよつと待っていてくれ。すぐに行くから」

「ヒューヒュー、熱いねお二人さん」

「何だよ本田？うらやましいのか？」

「な！？べ、別にそんなことはねえって！」

「遠慮するなよ。飯は皆で一緒に食ったほうが楽しいだろ。安島も誘ってこいよ」

「お、おう……」

本田は戸惑った表情のまま安島の席へと走っていく。

「おーい、本田と安島も誘っていいかぁ！？」

「うん！じゃあ、私もサトーちゃんと芹沢さん誘っていい？」

俺は返事の代わりに諏訪に向かって親指をピツと立てて見せた。諏訪は楽しそうに笑って俺に向かって親指を立てて返した。

今はそう、一秒でも、一分でも長くこいつらと一緒にいたいんだ。

END

あとがき

皆様、こんにちは。作者の新城寺ハヤトです。ムーンナイトウルフ
「月明かりのスポットライト」がようやく完成いたしました。最後
までご愛読してくださって誠にありがとうございます。最近では文
庫本でもあとがきを見てその本を買うかどうかを決めるそうですが、
自分の書いた作品に限りそれをさせるとネタバレなどが多すぎてつ
まらなく感じるかもしれません。なるべくネタバレをしないように
は気をつけているんですけど、ついつい…ね？（何が『ね？』なん
でしょう）

くだらない前置きはさておきまして、全てを投稿するまでにはだい
ぶ時間のかかったこのムーンナイトですが、実際の作成期間は四日
間という超勢いのみで書いたものでした。ふる「ローカルな格闘
ゲームをやっていたら不意に想像の神様みたいな方が降りてきて気
がついたらパソコンに向かっていたって感じですね。ですから設定
集とかも特に作っていないんです。これを作るのも自分の中では作
品を書くひとつの楽しみなんですけどね。さて、作品の内容につい
てですが、最初は向井君と諏訪さんのラブものにしてやろうかと思
いました。闘いで芽生えた愛って何とも輝かしいじゃないですか！
？しかし、途中で思っただけです。これでは少しベタすぎやしないか
と。たった一つの出来事がきっかけでくつつくなんてあまりにもお
決まりすぎだと。だから向井君には諏訪さんが何気ないアタックを
してもまったく気づかない鈍感朴念仁になっていただきました。結
果的に結構ツボなキャラクターにはなったと思うのですがいかがだ
ったでしょうか？

それではまたどこかでお会いできることを願ひまして作者の挨拶と
したいと思います。

月夜の狼達（登場人物紹介）

むかいかずき
向井一樹

一人目の主人公。幼少期にダンス教室に通っていたこともあり、運動神経（特に柔軟）は優れている。義務教育の生活とは違う高校生活に大きな期待を持っていたがクラスに馴染めずにいた。特に信念というものは持っていないため他人に合わせた行動が目立つが、今回の事件で少し変わりつつある？

諏訪 実（すわみのり）

向井一樹の相方にもう一人の主人公。一樹と同じクラスの女子生徒。クラスを盛り立てていきたいけど、そのやりかたがわからず結局は他力本願で突っ走っている女の子。作中では最初のほうこそ戦いを拒んでいたものの、一度戦うことの味を占めるや否や、中華鍋を武器に次々と珍技を編み出す。中学時代は陸上（短距離）でトップの実力を持っていた。ちなみにこの物語の中で最も強いのは彼女である。

本田&安島

本田は一樹とは席が前後という関係でそれなりに話はしている。一樹いわく『ムサイ奴』一方、安島は本田の友達で闘いを通じて一樹と仲良くなる。共に彼女ナシ。

芹沢&佐藤

芹沢は高校も現役の陸上部として活躍中。佐藤は実からはサトーちゃんと呼ばれていて、それなりに運動神経はある模様。本名佐藤都子。共に彼氏ナシ。

須磨高スマップ（自称）

本来の予定ならば彼らも最後の章に出す予定だったのだが、話の流れと人数が多いとややこしいという理由ですっぱりカット。彼らのダンスとノリは考えていてすごく楽しかった。ダンス用の曲を聞きながらノリノリで一時間ほど作業が停止していたというエピソードがあるほど思い入れがある人達。

担任（年齢不詳。でも若い）

向井達のクラス担任。まだ若く経験が少ないことから自信のない発言が多く、生徒にも押され気味な傾向があるが、生徒の気持ちを一番に考え、生徒を守るためには命さえも投げ出す覚悟のある熱血教師。しかしそこを悪魔につけこまれて体をのっとなられてしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1311b/>

ムーンナイトウルフ～月明かりのスポットライト～

2010年10月8日15時51分発行